

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 28

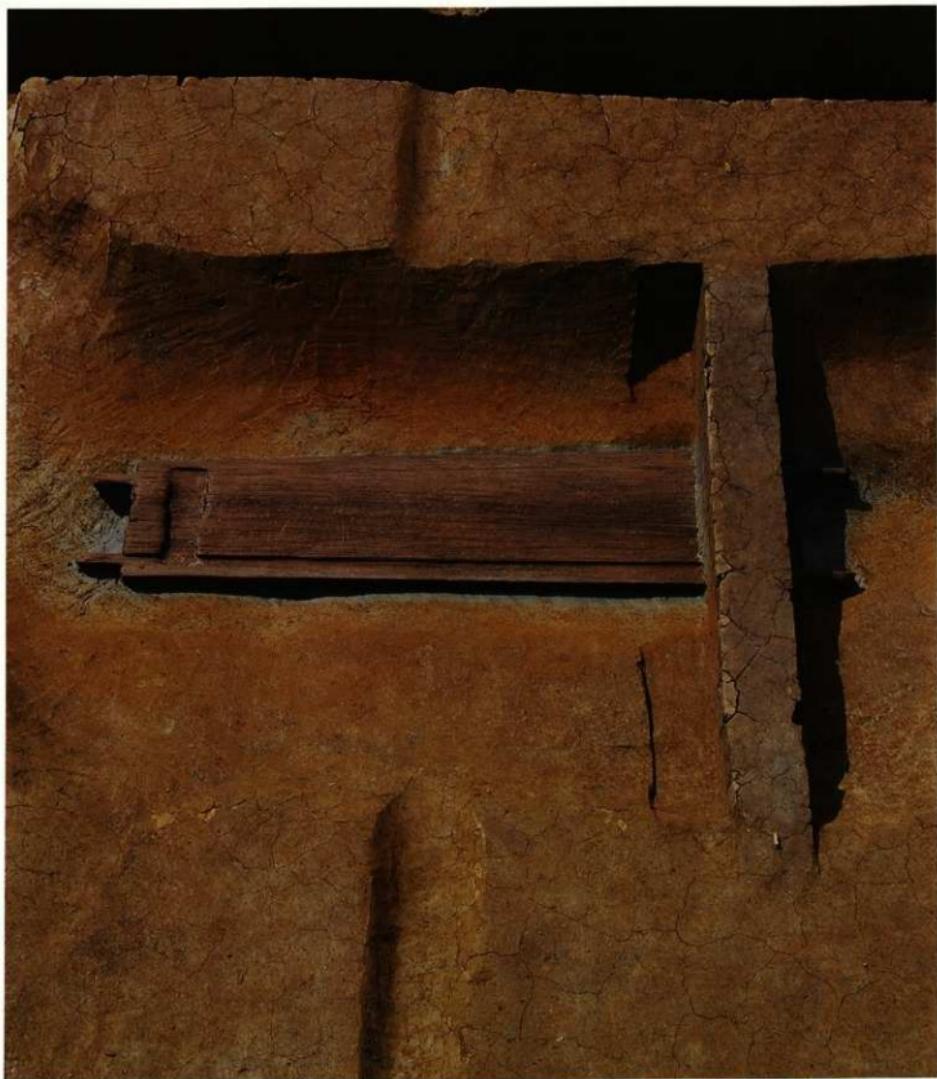
—平成19年度—

2009.3

香 芝 市 教 育 委 員 会



J地区第70トレンチ下田東2号墳全景（上が東）



下田東2号墳 木棺底板出土状況（東から）



下田東2号墳 木棺直下須恵器出土状況（南から）



下田東2号墳 南周濠土師器出土状況（北から）



K地区第68トレンチ 井戸2 検出状況



K地区第68トレンチ 井戸2 出土遺物

序 文

香芝市は奈良県の北西部、古代から穴虫越えや閑屋越えが通じ、大和と河内を結ぶ交通の要衝に位置しています。現在では鉄道が縦横に走り、大阪のベッドタウンとして急速に開発が進んで人口は増加の一途をたどっております。これに伴って発掘件数も増加し、市内各地で貴重な発見が相次いでいます。しかし、開発に伴う発掘調査のため、遺跡全体の性格が解明される前に消滅する危機にさらされています。

また、南西部には『万葉集』にもうたわれた二上山が聳え、人々に安らぎを与えていました。この二上山からはサスカイトや凝灰岩などが産出し、サスカイトは旧石器時代から石器の素材として、凝灰岩は古墳時代以降に石棺や基壇の化粧石などに利用され、それぞれの時代の文化の発展に寄与しました。

なお、市内には国史跡に指定されている尼寺廬寺跡や平野塚穴山古墳をはじめ、奈良盆地で初めて須恵器が生産された平野窯跡群、さらには、旧石器時代からの石器生産をおこなっていた二上山北麓遺跡群や5世紀末に築造されたものとしては全国屈指の規模を誇る前方後円墳の狐井城山古墳など、数多くの貴重な遺跡があります。

さて、今回報告する下田東遺跡は土地区画整理事業にともなって平成13年度から発掘調査を行ってまいりました。今年度で調査は終了しますが、初年度には帆立貝式の下田東古墳とその周囲から人物などの形象埴輪がみつかり、平成17年度には平安時代の井戸から「種蒔日」や「田刈」など農作業に関係する木簡が出土しました。さらに、昨年度は古墳の周濠から木棺の底板が完全な形で出土し、年輪年代測定によって450年頃に伐採されたことが判明するなど全国的に注目されています。

最後に、これまで発掘調査を実施するにあたってご協力を賜りました関係者の皆さんに感謝申し上げますとともに、今後も報告書刊行まで事業が円滑に進みますよう、関係各位のより一層のご指導、ご協力をお願いいたします。

平成21年3月

香芝市教育委員会
教育長 中谷 雄

例　　言

1. 本書は、奈良県香芝市下田東3丁目および狐井に所在する下田東遺跡、瓦口森田遺跡、未命名の遺物散布2箇所における、五位堂駅前北第二土地区画整理事業に伴う第7次発掘調査の概要報告である。なお、今後調査地一帯を「下田東遺跡」に再編する予定であり、本書も下田東遺跡として報告する。

2. 発掘調査は、平成19年度国土交通省国庫補助金事業の一環として実施した。

事業名	大和都市計画・五位堂駅前北第二土地区画整理事業		
事業者	香芝市		
調査体制	香芝市教育委員会事務局	生涯学習課	香芝市二上山博物館
	主　　査		山下隆次
	臨時職員	発掘調査員	清岡廣子
		同	辰巳陽一

なお、現地調査はK地区第68トレンチ、J地区第69トレンチを清岡、J地区第70トレンチを辰巳が担当した

3. 本書で使用した方位は真北を示し、挿図の座標軸および座標値は世界測地系による。海拔値は東京湾の平均海面を基準にしている。

4. 発掘作業にかかる土木作業は安西工業（株）及び（社）香芝市シルバー人材センター、現地遺構測量、遺物実測、遺構実測図及び遺物実測図のデジタルトレースは（株）文化財サービス、出土遺物の写真撮影はファームにそれぞれ委託した。航空写真撮影は計2回を行い、第1回目は（株）アコード、第2回目は写測エンジニアリング（株）が実施した。

なお、下田東2号墳出土木棺底板について、（財）奈良文化財研究所の光谷拓実氏に年輪年代測定、国立歴史民俗博物館にAMS-¹⁴C年代測定を依頼した。

5. 発掘調査及び本書の作成にあたり、以下の方々の御助言、御協力を得た。記して感謝します。（敬称略・順不同）

石野博信、大脇潔、和田晴吾、光谷拓実、西藤清秀、今尾文昭、岡林孝作、小栗明彦、水野敏典、関川尚功、豊岡卓二、中井一夫、立石堅志、森下恵介、井上義光、名倉聰、前澤郁浩、吉村公生、鍾方正樹、青木勘時、小池香津江、鈴木裕明、福田さよ子、奥山誠義、十河良和

6. 本書の執筆は第68、69トレンチについては清岡、第70トレンチについては辰巳が担当した。

目 次

遺跡の位置と環境（辰巳）	1
既往の調査（辰巳）	1
平成13年度（第1次調査）	
平成14年度（第2次調査）	
平成15年度（第3次調査）	
平成16年度（第4次調査）	
平成17年度（第5次調査）	
平成18年度（第6次調査）	
平成19年度（第7次調査）	4
各調査区の概要	
K地区（清岡）	4
第68トレンチ	
遺構	5
遺物	16
J地区	36
第69トレンチ（清岡）	
遺構	38
遺物	41
第70トレンチ（辰巳）	
遺構	42
遺物	43
まとめ（辰巳）	68
参考文献	70

挿図目次

- 第1図 第68トレンチ東壁断面図 (1/100)
第2図 第68トレンチ第1、2遺構面平面図 (1/400)
第3図 第68トレンチ第3遺構面平面図 (1/250)
第4図 第68トレンチ土坑2遺構平面図 (1/30)
第5図 第68トレンチ土坑断面図1 (1/40)
第6図 第68トレンチ土坑断面図2 (1/40)
第7図 第68トレンチ井戸2平面面図 (1/30)
第8図 第68トレンチ井戸1、3平面面図 (1/40)
第9図 第68トレンチ土坑1出土遺物実測図1 (1/4)
第10図 第68トレンチ土坑1出土遺物実測図2 (1/4)
第11図 第68トレンチ土坑2出土遺物実測図1 (1/4)
第12図 第68トレンチ土坑2出土遺物実測図2 (1/4)
第13図 第68トレンチ土坑4出土遺物実測図1 (1/4)
第14図 第68トレンチ土坑3出土遺物実測図 (1/4)
第15図 第68トレンチ土坑4出土遺物実測図2 (1/4)
第16図 第68トレンチ各遺構出土製塙器、溝2出土遺物実測図 (1/4)
第17図 第68トレンチ土坑5出土遺物実測図1 (1/4)
第18図 第68トレンチ土坑5出土遺物実測図2 (1/4)
第19図 第68トレンチ土坑5出土遺物実測図3 (1/4)
第20図 第68トレンチ土坑5出土遺物実測図4 (1/3)
第21図 第68トレンチ土坑6出土遺物実測図 (1/4)
第22図 第68トレンチ井戸2出土遺物実測図1 (1/6)
第23図 第68トレンチ井戸2出土遺物実測図2 (1/6)
第24図 第68トレンチ井戸2出土遺物実測図3 (1/6)
第25図 第68トレンチ井戸2出土遺物実測図4 (1/6)
第26図 第68トレンチ井戸2出土遺物実測図5 (1/6)
第27図 第68トレンチ井戸2出土遺物実測図6 (1/6)
第28図 第68トレンチ井戸2出土遺物実測図7 (1/4)
第29図 第68トレンチ井戸2出土遺物実測図8 (1/3)
第30図 第69トレンチ西壁、北壁断面図 (1/100)
第31図 第69トレンチ各遺構面平面図 (1/200)
第32図 第69トレンチ井戸平面図、立面図 (1/30)
第33図 第69トレンチ井戸断面図 (1/40)
第34図 第69トレンチ土坑1平面図、立面図、断面図 (1/20)
第35図 第70トレンチ遺構平面図 (1/200)
第36図 第70トレンチ東壁、北壁、南壁、西壁断面図 (1/100)
第37図 第70トレンチ下田東2号墳 平面図、周濠セクション断面図 (1/50)
第38図 第70トレンチ下田東2号墳 木棺出土状況図 (1/10)
第39図 第70トレンチ下田東2号墳 木棺直下須恵器出土状況図 (1/10)
第40図 第70トレンチ下田東2号墳 木棺、木棺直下須恵器相関図 (1/10)
第41図 第70トレンチ下田東2号墳 出土木棺底板実測図 (1/10)
第42図 第70トレンチ旧河道、SX01、ST01出土遺物実測図 (1/2, 1/4)
第43図 第70トレンチ下田東2号墳 出土木棺底板樹種同定結果
第44図 第70トレンチ下田東2号墳出土木棺復原模式図

表目次

- 第1表 第70トレンチ北壁土色
- 第2表 第70トレンチ西、南、東壁土色
- 第3表 第70トレンチ出土遺物観察表
- 第4表 木棺計測比較表

図版目次

- 卷頭図版 1 下田東2号墳全景
- 卷頭図版 2 下田東2号墳木棺底板出土状況
- 卷頭図版 3 下田東2号墳木棺底板直下須恵器出土状況
下田東2号墳南周濠底部土師器出土状況
- 卷頭図版 4 第68トレンチ井戸2検出状況
第68トレンチ井戸2出土遺物
- 図版 1 第68トレンチ全景
- 図版 2 第68トレンチ各遺構1
- 図版 3 第68トレンチ各遺構2
- 図版 4 第68トレンチ井戸2
- 図版 5 第69トレンチ全景
- 図版 6 第69トレンチ各遺構
- 図版 7 第70トレンチ全景
- 図版 8 第70トレンチSX01遺物出土状況
第70トレンチSX01出土遺物
- 図版 9 下田東2号墳出土木棺底板
- 図版10 下田東2号墳木棺底板直下出土須恵器
下田東2号墳南周濠底部出土土師器

下田東遺跡第7次調査概要報告

遺跡の位置と環境

香芝市は奈良盆地西部の一角を占め、奈良県北西部に位置する。東に大和高田市、北葛城郡広陵町、上牧町、西に大阪府柏原市、羽曳野市、南河内郡太子町、南に葛城市、北に北葛城郡王寺町が接している。大阪府側から発達してきた鉄道、国道、高速道路などの交通網により都市通勤圏のベッドタウンとして近年著しく人口が増加し、平成3(1991)年に県内10番目の市制を施行した。

下田東遺跡の所在する市の南西部は標高52.000m～54.000mに沖積平地が広がっており、宅地開発が進む10年ほど前まで、10～11世紀頃に奈良盆地一帯で施工された条里制地割りの水田地帯が明瞭に残されていた。その地割りの南北軸に沿って東から熊谷川、山崎川、杉橋川、初田川、鳥居川が北流して大和川水系の葛下川に注ぎ込んでいる。平地の北側には標高60.000m～80.000mのなだらかな馬見丘陵南西麓が横たわる、丘陵縁端を葛下川が北西に流れている。

周辺には、西方に旧石器時代の遺跡として知られる二上山北麓遺跡群があり、馬見丘陵の南西にはナイフ形石器が出土した鈴山遺跡がある。また、縄文時代の遺跡として前期の北白川下層Ia式～大歳山式の土器、石器や獸骨が大量に出土した狐井遺跡、下田遺跡があり、瓦口森田遺跡では後期末の宮滝式～滋賀里I式の土器が出土している。しかし、弥生時代においては遺跡の存在は稀薄であり、法楽寺山遺跡で後期の土器を伴った土坑、下田味原遺跡から後期の土器が出土する溝など、少數の遺構が検出されている程度である。

古墳時代にはいると市域内の土地利用は活発化する。護岸遺構などが検出された前期～中期の鎌田遺跡、土坑や水路などが確認された中期～後期の藤ノ木丁遺跡など、集落域も既往の発掘調査により判明している。

古墳は馬見丘陵とその南西側の平地に散在する。古墳時代前期では丘陵南端に前方後円墳の土山古墳、直径約10.0mの円墳の長谷山古墳がある程度であるが、後期になると御坊中第1号墳と同第2号墳、同第3号墳、御坊山第1、2号墳、勘平山第1、2号墳のような、直径10.0m～25.0m程度の円墳が各尾根支脈に築かれる。平地側では中期後半に全長140.0mの前方後円墳である狐井城山古墳や狐井稻荷古墳、下田東1号古墳がある。

古代の遺跡としては丘陵上に瓦散布地が点在している。中世には平地に莊園「平田庄」が開発され、丘陵上には瓦城跡、鈴山城跡、下田城跡、古墳を利用した狐井城跡が築かれた。くわえて、良福寺環濠、五位堂環濠、瓦口環濠などが成立した。

既往の調査

下田東遺跡は、香芝市下田東三丁目および大字狐井にかけての平地上に広がる、集落跡を中心とした複合遺跡であり、縄文時代早期から江戸時代にわたる土器が出土する。昭和55年の水路改修時に縄文土器などが採集され、その存在が知られることとなった。その後、永らく発掘調査は行われず、平成13年度から「五位堂駅前北第二土地区画整理事業」に伴い、発掘調査を実

施することとなった。本概要報告書は、平成19年度に行った第7次調査の成果を報告するものである。

平成13年度(第1次調査)

山崎川以東の事業地北東区域において6,097.0m²を調査した。その結果、墳丘長21.0mの帆立貝式古墳である下田東古墳が確認された。その周濠内からは円筒埴輪のほか家形、人物、馬形、鶴形等の形象埴輪が大量に出土した。古墳が立地する微高地の南側で検出した自然河道内には、古墳時代後期から奈良時代にかけての土師器、須恵器の完形品が多量に遺存していた。それ以外にも、飛鳥時代の軒丸瓦、軒平瓦、鷲尾、埠などが出土している。このことによって、事業地内もしくは付近に、記録に残されていない瓦葺き建物の存在が想定されることとなった。このほか、平安時代頃までの掘立柱建物、井戸も検出されている。

平成14年度(第2次調査)

山崎川以西の事業地西側区域を対象として延べ16,264.0m²を調査し、自然河道に挟まれた微高地状の原地形上において、古墳時代後期から平安時代にかけての掘立柱建物跡を多数確認している。このうち古墳時代後期の掘立柱建物群は微高地の延びる地形に沿って建てられており、区画溝が方形状に巡らされていた。自然河道埋土は古墳時代の土師器、須恵器の完形品を多量に含んでおり、水辺祭祀が行われたと考えられる。

平成15年度(第3次調査)

前年度調査区の隣接区域と事業地東側、南側区域において、8,596.0m²を対象に調査を行った。事業地西側では弥生時代に埋没したと考えられる自然河道が大小あわせて3条検出されたが、その他に顯著な遺構は存在しなかった。近鉄大阪線に面した事業地南側では、古墳時代から平安時代にかけての溝、土坑、掘立柱建物跡などを検出している。事業地東側では、試掘調査で遺物包含層下に遺構面を3面確認した。調査の工程上、単年度調査が不可能になったため、第1、2遺構面を上層調査として15年度に、第3遺構面を下層調査として16年度に行った。

第1遺構面

標高52.200m付近の平地を地盤とする中世から近世にかけての遺構面で、自然河道に挟まれた部分の土地開発に伴って施された東西、南北の500条を超える素掘溝を検出した。

第2遺構面

調査区南側で検出した14世紀後半から15世紀初頭までに機能したと考えられる環濠居館を検出した。環濠は東西93.0m、その東端、中央、西端に取り付く南北方向の約20.0m分を検出した。西側は幅広・平底で大型、東側は幅狭・丸底で小型であり、形状、規模は異なっているが、同一時期の開削であることを確認している。環濠内からは土師質土釜、瓦質擂鉢、木製椀、石製品が出土した。また、濠に隠される西側区画では主屋が検出されている。

第3遺構面(平成16年度調査)

飛鳥時代から平安時代にかけての自然河道について大規模調査を実施した。河川内遺構として橋脚、堰、魚入状の各施設と考えられる木製杭列を調査区西端で、南東、中央、北西の各区域で護岸施設を検出した。遺物はサヌカイト測片、土師器、須恵器、被熱痕のある凝灰岩切石が出土している。これらに混じって円筒埴輪、勾玉(蛇紋岩製)など古墳時代の遺物や、河床から川原寺式軒丸瓦、壇(仏陀寺式)、斎串など飛鳥時代の遺物が出土した。また、橋脚、堰遺構周辺では軒丸瓦、軒平瓦、墨書き土器、墨書き人面土器、土馬、馬齒、木製鶴などの奈良時代の遺物が出土している。また河川内遺構周辺では奈良時代の祭祀関係遺物が多数出土しており、13年度調査成果とあわせてこの自然河道一帯で祭祀が行われていたことが明らかとなった。

平成16年度(第4次調査)

平成15年度調査区に隣接する区域と事業地東側、南側区域の4,743.0m²について調査を行った。調査区東端では前年度調査で検出した自然河道の西岸を確認し、土師器、須恵器、曲物側板などの遺物が出土した。これより西側では、東西、南北に走る素掘小溝以外に柱穴、区画溝、井戸などの遺構を約450基検出し、総柱のものを含めて約20棟分の掘立柱建物を確認している。掘立柱建物は区画溝と平行位置で建てられるものと、方位を意識して配列されたものとに分けられる。前者はその上層埋土から飛鳥時代、後者は建物群の中央に位置する井戸から出土した土器から、奈良時代のものと考えられる。また、「天」、「東」、「西」などの文字を墨書きした土器が出土していることから、これらの建物群は官衙的な施設であった可能性が高く、遺跡の性格を考えるうえで重要な成果となった。

平成17年度(第5次調査)

平成14年度と16年度の調査で検出した掘立柱建物群の調査区に挟まれた区域を中心に4,764.5m²を調査した。

H地区

事業地のほぼ中央に設定した調査区で、面積は1,392.0m²である。

第1遺構面

素掘小溝以外にピット、掘立柱建物、井戸、土坑など約450基の遺構を検出したが、その大半がピットである。掘立柱建物は奈良時代から平安時代のものと見られ、役所などの施設の一部と考えられる。井戸は古墳時代から現代のものまで計10基を検出し、平安時代の1基からは斎串や墨書き土器、打欠きのある土器など、祭祀に伴う遺物や木簡などが出土している。木簡は表裏両面に墨書きがあり、破片ではあるが情報量が多く遺跡の性格を考えるうえで重要な史料である。

第2遺構面

調査区東半に位置する自然河道は、幅15.0m以上で調査区を縦断し、さらに東側に延びている。断面には数回にわたる堆積が見られ、一定期間流路となっていたことが理解される。遺物は底部に縄文土器細片が僅かに出土したのみであった。この自然河道上に井戸が密集して築かれて

おり、居住域や耕作地として利用されたことが窺える。一方、調査区中央を南北方向に走る幅1.0m~2.0m、深さ約1.0mの流路状遺構を検出している。

I 地区

H地区の東隣に位置し、面積は1,682.5m²である。上から盛土・旧表土(耕作土)、床土となる。床土の下層は灰白色の近世の耕作土層が堆積し、さらに1層下に第1遺構面とした中世から近世の素掘小溝を検出した。ただし、調査区東端では近代の水路により擾乱を受けていたため第1遺構面は検出できなかった。また、調査区中央付近の黄灰色粘質土の地山面を第2遺構面とした。さらに第3遺構面でH地区より続く河道を検出し、以下無遺物層であることを確認した。

平成18年度(第6次調査)

葛下川流路の南、事業地ほぼ中央南よりの一帯において区画道路予定地、都市計画道路予定地の計2,737.0m²を調査した。主な遺構は平安時代から近世にかけての素掘小溝、掘立柱建物、井戸であった。また、葛下川の旧河道と考えられる自然流路を検出している。当該地域は事業地内でも遺構密度が低く、葛下川の氾濫に伴うと思われる砂礫が調査地の至る所で見られることから、居住地としての土地利用は極めて稀薄であり、専ら耕作地として利用されていたことが窺える。

遺物は土師器、黒色土器が大半を占めるが、耕作土層および井戸枠内から7世紀第II~III四半期に遡る軒瓦片が出土している。また柱穴から、礎盤に転用されたと見られる平城宮6664型式I種の軒平瓦が出土したが、この瓦は平瓦部凸面に朱が残存していることから、平城宮内の建物に葺かれていたものを再利用したと考えられる。当事業地内では、このほかに平城宮式の軒瓦が数点出土しており、それらとあわせ平城宮との関わりが想定される。

平成19年度(第7次調査)の概要

平成19年度は土地区画整理事業地の東南端部(K地区)および北東端部(J地区)において、3本のトレンチを設定し、全1,856.0m²を対象に発掘調査を実施した。なお、調査期間は平成19年6月11日~平成20年3月27日で、実働171日を要した。各調査区の概要は次節以降の通りである。

各調査区の概要

一、K地区

第6.8トレンチ(第1図~3図)

土地区画整理事業地の最も東南部において、都市計画道路および付帯道路敷設予定地が調査対象地である。都市計画道路敷設予定地に東西9.0m×南北66.0m、付帯道路敷設予定地に東西7.5m×南北65.5mのトレンチを設定した。調査面積は1,085.0m²である。

基本層序

上から順に現代耕作土、黄茶褐色砂質土(第I層)、灰色粘質土、茶褐色砂質土、暗褐色砂質土、灰色砂層、黄褐色粘質土からなる第II層、黒褐色粘質土、黄褐色粘質土(第III層ベース)である。

南から北に向かって地形が低くなっている。北半は耕作土層の下に厚い砂層が堆積する。調査は、重機掘削により第Ⅰ層を除去した面を第1造構面として行い、同時に部分的に下層造構を検出した。よって、これらの下層造構面を第2造構面とした。第1造構面から第2造構面の耕作土層下には一部地表面化した土層(第Ⅲ層上面)や砂層が認められ、その直下に堆積する黄褐色粘質土(第Ⅲ層)を第3造構面として造構検出を行った。

造構

第1造構面(第2図)

耕作に伴う素掘小溝が主に南北方向に幾重にも重なって検出された。東西方向の素掘小溝もあるが圧倒的に南北方向が多い。調査地北側はかつて樹木が植栽されており、耕作土層を除去した造構面にまでそれらの根による攪乱が及んでいた。この面で検出した素掘小溝は現在の地表面の区画に合致し、土地が大きく三分割されている様子を見て取ることができる。

南北方向の素掘小溝は、トレンチ北半と南半で方向性に違いが認められ、北側のものはやや東に傾いている。東西に走っている区画溝の周囲では同方向の素掘小溝が認められることから、区画と畦畔を意識したものであることが窺える。現代の土地区画に則して、南から北に向かって地形が低くなっている。調査区北側では耕作土が厚く堆積している。出土遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、陶器、製塙土器、円筒埴輪、形象埴輪、瓦、石器(石礫ほか)で、下層造構を反映してか、古墳時代の遺物が多く出土している。

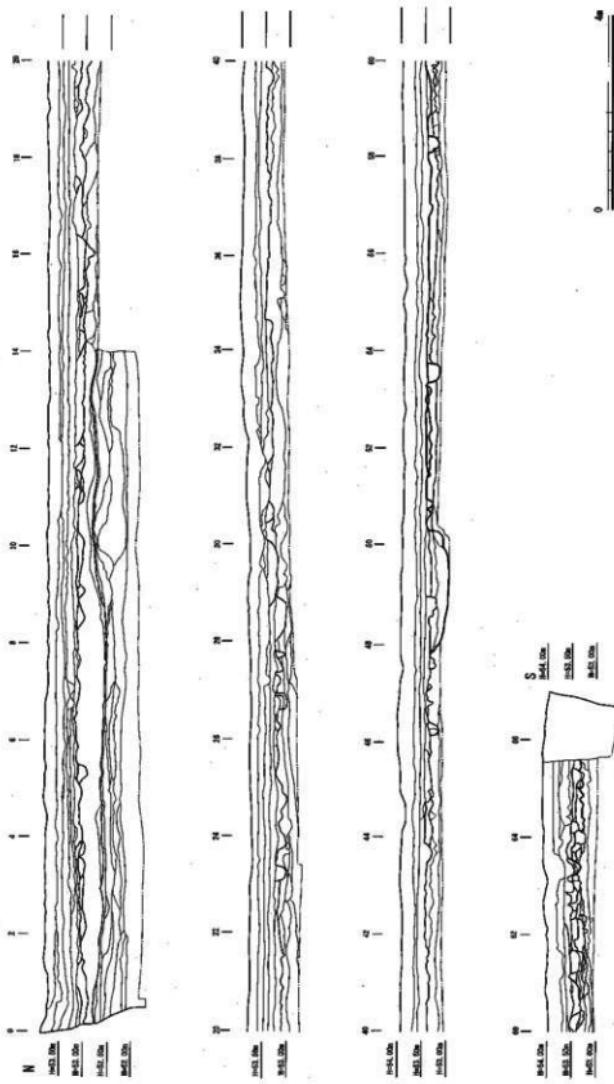
第2造構面(第2図)

調査区南端で検出した黄褐色土層(第Ⅱ層ベース)上面において、第1造構面から部分的に掘り下げて造構検出を行った斜行溝5条と、それに付帯する素掘小溝群を検出した。また、上面で検出したピットや小溝等の下層造構を当造構面のものとした。

ピットや小溝は茶褐色土から黒褐色土の色調の埋土であるが、調査区南端部のピットは完掘し、中央部付近のそれらは時間的制約等により部分的な平面検出と掘削に留め、第3造構面の調査の際に完掘した。出土遺物は、土師器、須恵器等である。斜行溝群は第1造構面の素掘小溝の下層にあたり、やや弧状を呈する素掘りの溝で、調査地の東側へと伸びる。これらは条里に沿わない溝であり、合流部分で南北方向の素掘小溝や、やや屈曲した南北方向の素掘小溝と接続し、それらには新旧が認められる。当トレンチの南に隣接する第5次調査のK地区でも同一の斜行溝のほか、それに取り付く、同様な形状の南北方向の素掘小溝を検出している。この周辺では安定した基盤層(第Ⅲ層上面)の高まりを有すること、斜行溝に新旧の切り合い関係が認められることから、土地の制約を受けつつも条里を意識した土地利用を行ったと理解できよう。出土遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、円筒埴輪、形象埴輪、瓦、石器等である。

また、耕作土層下には一部で地表面化した黄褐色土層(第Ⅱ層ベース)と砂層が認められた。調査区北半では、地表面化した耕作面が少なくとも下層に2面程度存在することが掘削時の状況から看取できた。耕作土層下に堆積した砂層は河川氾濫等による自然堆積層と考えられ、その上面では古代の土師器甕がほぼ完形で出土した。この砂層直下で井戸3を検出したことから、

第1図 斧68H-シチ 東縦断面図



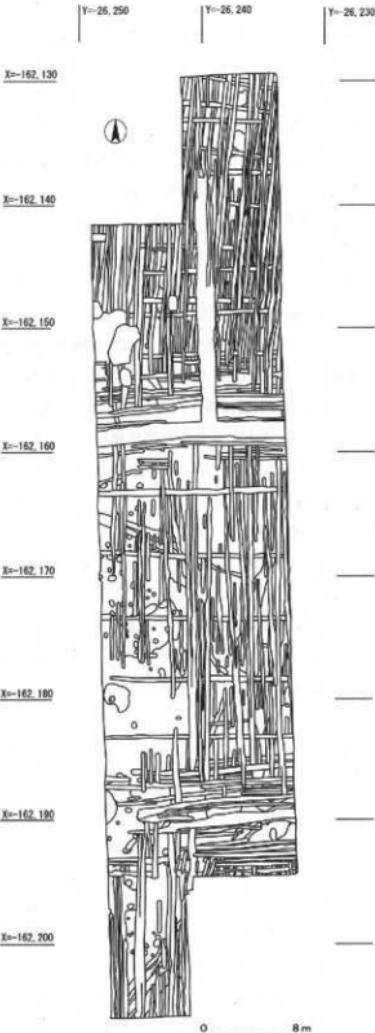
平安時代以降に河川氾濫が調査区の南半中央部に及び、砂層が形成されたと推測される。また北半はこの砂層が厚く、何度かの氾濫堆積があったことが窺える。出土遺物は少ないが、古墳時代から古代の遺物が中心で、土師器、須恵器、円筒埴輪、石器等が出土した。また、特筆すべきものとして縄文時代前期土器(北白川下層IIA式)がある。これは、当遺跡で出土した前期縄文土器でも初めてであり、かつ旧石器時代を除いて最も古い時期の遺物であるが、平安時代の井戸2基より上層に砂層が堆積していることから、本来の時代を反映していない。

第3遺構面(第3図)

黄褐色粘土からシルト粘質土～粘砂質土を基盤層として、古墳時代の土坑6基、井戸1基(井戸2)、溝2条と、平安時代の井戸2基(井戸1、3)、ピットを検出した。古墳時代の土坑6基は、トレーナー南半において、第1遺構面検出時に一部露出していた黒褐色土の包含層を当遺構面で各々遺構として捉えたものである。ピットはトレーナー中央西側と南西側で集中して確認しており、総数は約70基である。原地形は、各遺構が集中する南半は安定した基盤層が形成されており、中央から北側に向かって低くなっている。北半は旧葛下川の河川氾濫等により基盤層は薄く、遺構も井戸1基以外は確認できない状況であった。

土坑1(第5図)

調査区南端で検出した。一辺約4.0m～4.5mの不定形な平面を有し、深さは0.2m～0.4mである。北側は上層の東西方向の素掘小溝により削平を受け、西側が一



第2図 第68トレーナー 第1、2遺構面平面図

部やや鋭角となる。最上層は耕作に影響を受けた黒褐色土の包含層で、上層は黒褐色土、下層は黄褐色土ベース層を含んだ堆積土で埋没していた。遺物は最上層から上層に集中し、下層にはほとんど含まれない。土師器、須恵器、円筒埴輪、形象埴輪、製塙土器が出土している。

土坑7(第6図)

土坑1の東側で検出した、平面が楕円形状の東西辺約0.8m、深さ0.05mの遺構である。当初、土坑1の拡がりと捉えていたが、ベース面において別遺構であることを確認した。土坑1と同様に、北側は上層からの東西素掘小溝によって削平を受ける。土坑2南側にも同様の深い窪みが認められ、本来は楕円形に北に延びていたと思われる。遺物の多くは土坑1で取りあげており、須恵器が主である。

土坑2(第4図、5図)

土坑1の北側で検出した、中央が南北辺約2.0m、東西辺3.0mの隅丸長方形の土坑である。北側に南北約1.0m、東西約2.0mの深い落ち込みがあり、土坑3と接している。最も深い部分で0.5mある。最上層は耕作に影響を受けた黒褐色土の包含層で、遺物が多く出土する。埋土は粘質土～シルト質土からなる自然堆積層で、上層の窪みに一括して遺物を放棄したような状況が観える。下層からは少量の遺物が出土する。出土遺物は、土師器、須恵器、円筒埴輪、形象埴輪、製塙土器がある。

土坑3(第6図)

土坑2の北側で検出した、平面が東西辺約3.0m、南北辺約2.0mの隅丸長方形の土坑である。下層のベース層において各土坑との判別を行ったために、検出面からの深さは0.15mとなった。最上層は耕作に影響を受けた黒褐色土の包含層で、上層は黒褐色土、下層はベース層を含んだ堆積土で埋没している。遺物は、土師器、須恵器、製塙土器が少量出土している。

土坑8(第6図)

土坑3の東側で検出した、一辺約0.6m～0.8mの平面楕円形の深い窪みで、土坑3との判別が下層のベース層であったために、深さは0.05m～0.1mとなった。当初、土坑3と一緒にと考え掘削を行ったため、遺物の多くは土坑3のものとして取りあげている。土師器、須恵器、製塙土器が出土している。

土坑4(第6図)

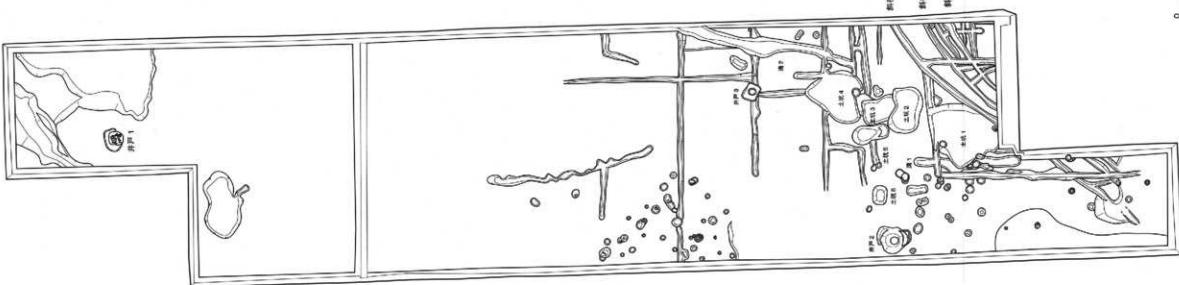
土坑3の北側で検出した、一辺約3.0m～4.0mの不定形な堀形をもつ遺構である。深さは0.1m～0.3mである。最上層は耕作に影響を受けた黒褐色土の包含層で、下層からの巻き上げられた遺物が多く出土する。上層は黒褐色土、下層はベース層を含んだ堆積土で埋没している。遺物は、土師器、須恵器、円筒埴輪、製塙土器、弥生土器が出土している。

土坑5(第6図)

土坑3の西側で検出した、東西0.9m～1.25m、南北2.5m平面楕円形の土坑である。北側に向かって深くなり、深さは約1.0mである。砂層まで到達していることから、井戸枠などの構造物をもたない、素掘りの井戸として利用されたものと思われる。最上層は耕作に影響を受けた黒褐色土の包含層で、上層は黒褐色土、中層から下層は暗灰緑色土である。遺物は、最上層お

Y=26.240
Y=26.250

①



第3図 第68 trench 第3断面平面図

より上層から中層に集中し、下層からは木製品が出土した。他の遺構よりも圧倒的に遺物量が多く、廃棄したような状況が窺える。土師器、須恵器、製塙土器、円筒埴輪、木器(種子、木板片)、木製品(紡績具)が出土している。

土坑6(第6図)

調査区南西側で検出した、東西0.9m、南北1.25mの偏楕円形の土坑で、深さは1.0mある。砂層まで到達しており、最下層に土師器甕が1個体完形で埋置されていることから、素掘りの井戸として利用されたものと考えられる。出土遺物は、土師器、須恵器、円筒埴輪、製塙土器があるが量は少ない。

井戸2(第7図)

土坑6の西側で検出した、円筒埴輪を井戸枠に使用した井戸である。平面中央部が円形で、南北にそれぞれ張り出しのある、やや亜な掘形をもつ。中央部は東西1.7m、南北1.8mで、張り出し部を含めた南北長は2.3m、深さは1.3mである。下田東遺跡では数多くの井戸が検出されているが、円筒埴輪を転用して井戸枠としたものは初の出土例である。井戸枠は2個体の円筒埴輪を組み合わせて作られており、掘形中央のやや南寄りに設置されていた。検出面では一辺約0.5mの円形で、上段が下段に入れ子状に嵌った状態で出土し、井戸枠の全長は約1.2mであったと考えられる。透孔には別の埴輪片で蓋をして水が漏れないようにしておらず、これらの埴輪片には数個体分が確認できた。上段の円筒埴輪は口径0.5m、底径0.46m、全長1.27m、下段のものは底径0.44m、高さ0.5mで、基底部は欠損部位もあり、外周に埴輪片を巻き並べた状況が窺える。透孔に蓋をした埴輪片には掘形から出土したものと接合する例があることから、透孔に粘土で蓋を貼り付けつつ、掘形の土を積み上げたものと考えられる。井戸枠に使用された円筒埴輪は6世紀前半に比定されると考えられるが、掘形埋土にはこれと同時期の円筒埴輪が多量に包含されている。このことから、井戸枠に使用した埴輪と同規模の円筒埴輪が一定量持ち込まれていることが理解できる。直径0.5m、全長1.0m以上となると、この時期の埴輪としては規模の大きなものということができる。埋土には土器をほとんど含まないが、井戸枠内の出土遺物から、製作年代は6世紀後半頃と想定している。枠内の埴輪は数個体分の埴輪に復元できるため、上段の上にもう一段組まれていた可能性もある。最下層では、井戸を廃棄した際の祭祀に伴う遺物であると考えられる斎串、木鎌、種子が出土した。

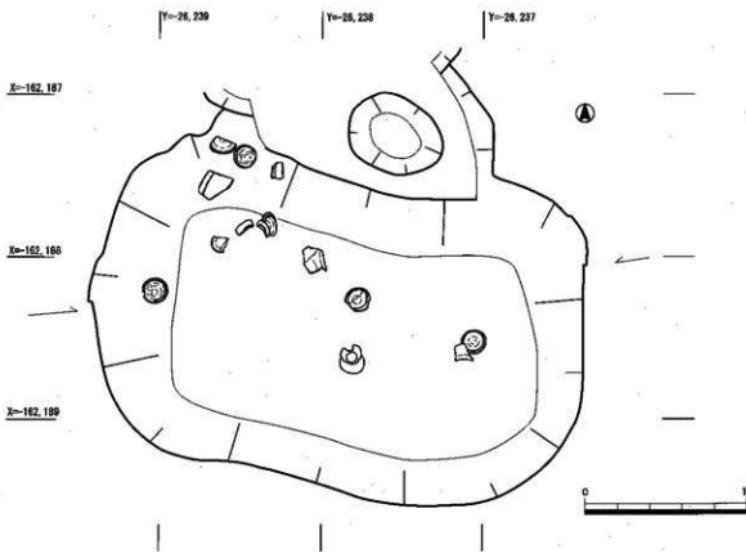
溝1

北側は東西幅0.6m、深さ0.2mで、南側は東西幅0.7m、深さ0.1mの南北方向に長い溝状遺構である。北側では円筒埴輪が集中して出土し、南側の遺物集中部分からは土師器、須恵器等が出土した。

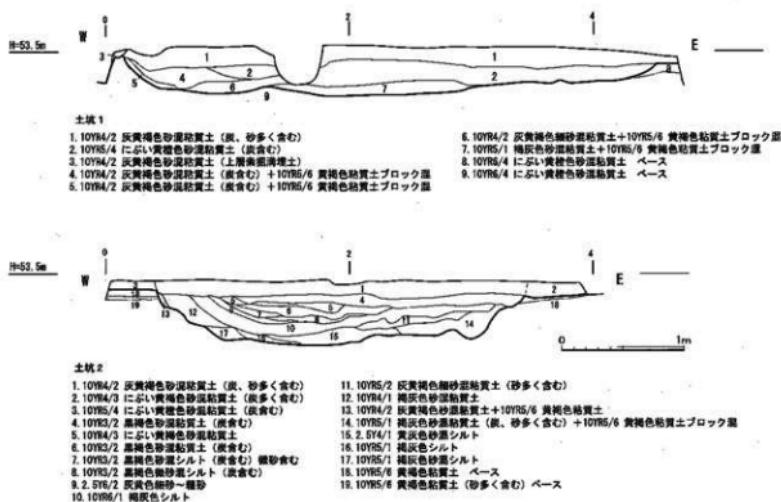
溝2

東西幅0.6m~1.4m、深さ0.3m~0.5mで、南西から北東に斜行する長い溝で、調査区外まで延びる。上層に遺物を多く含み、土坑と同様の状況を示す。出土遺物は、土師器、須恵器、円筒埴輪、石器がある。

また、平安時代の遺構は、井戸2基にくわえ、ピット約60基を検出している。



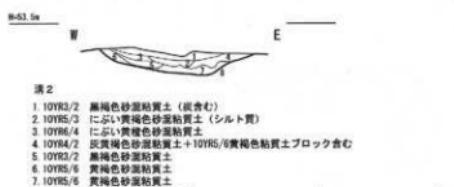
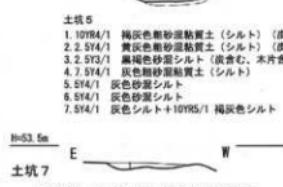
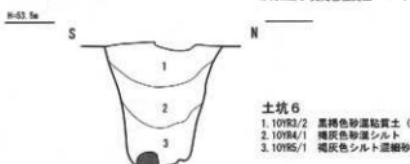
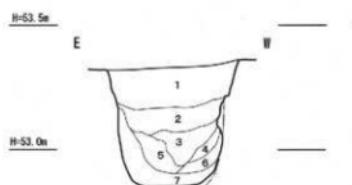
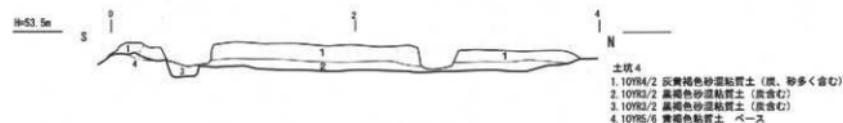
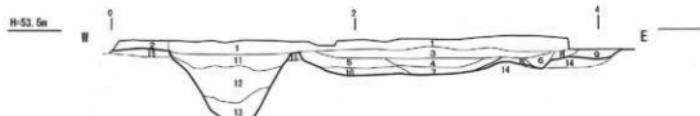
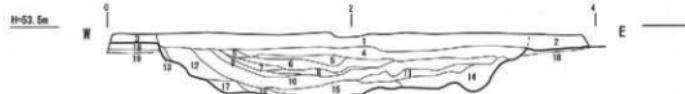
第4図 第68トレンチ 土坑2平面図



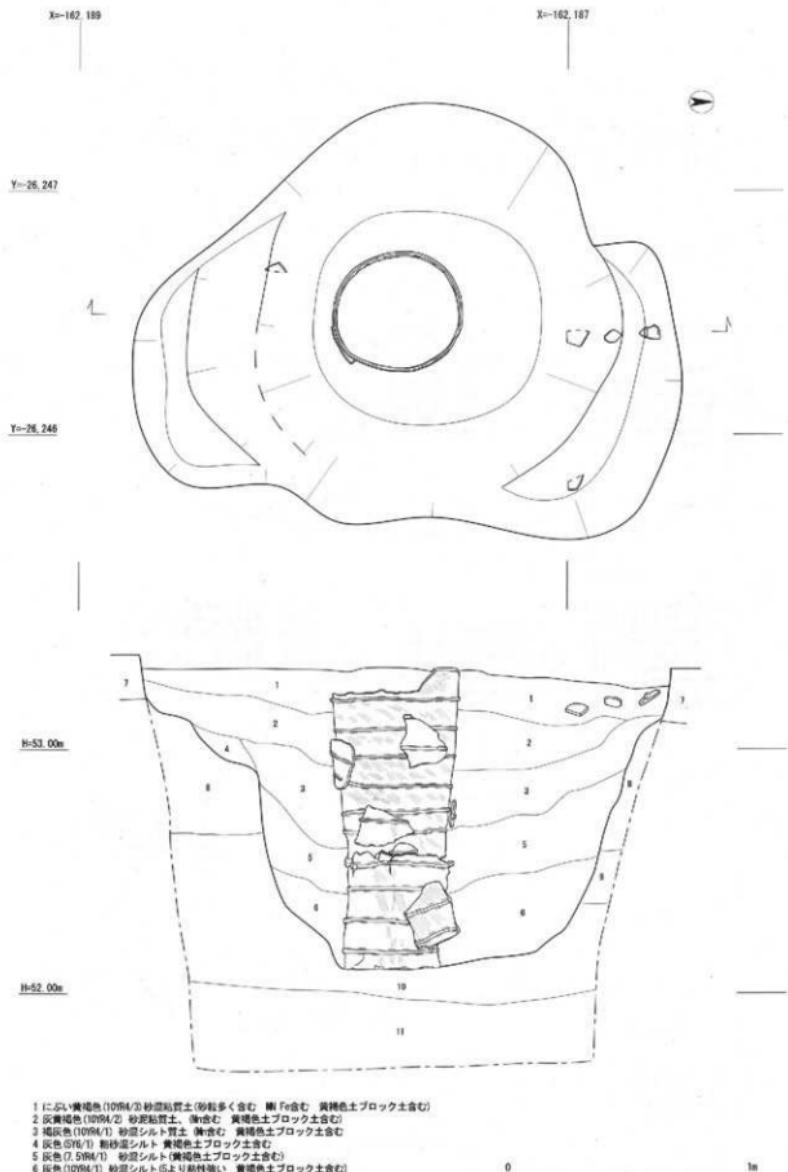
第5図 第68トレンチ 土坑断面図



6. 10YR5/2 黄褐色細砂混粘質土 + 10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック層
 7. 10YR5/1 黑褐色細砂混粘質土 + 10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック層
 8. 10YR5/4 にじいろ黄褐色砂混粘質土 ベース
 9. 10YR5/4 にじいろ黄褐色砂混粘質土 ベース

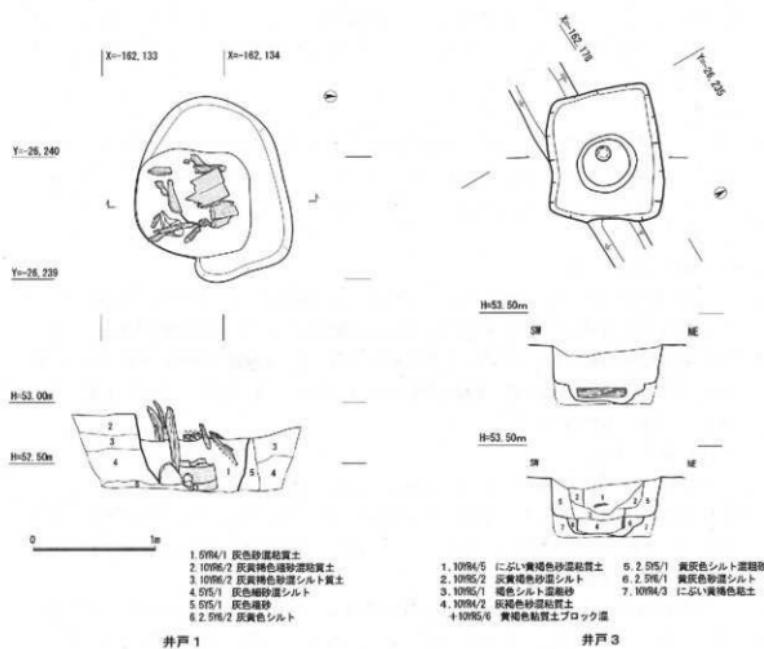


第6図 第68トレンチ 土坑断面図2



- 1 にぶい黄褐色(10YR4/1)砂質粘質土(砂粒多く含む Fe含む 黄褐色土ブロック土含む)
- 2 反覆褐色(10YR4/2) 砂泥粘質土(微含む 黄褐色土ブロック土含む)
- 3 堀褐色(10YR6/1) 砂泥シルト質土(微含む 黄褐色土ブロック土含む)
- 4 灰色(5G6/1) 粗砂泥シルト 黄褐色土ブロック土含む
- 5 灰色(7.5YR4/1) 砂泥シルト(黄褐色土ブロック土含む)
- 6 黄褐色(10YR4/2) 砂泥粘質土(砂粒多く含む Fe含む 黄褐色土ブロック土含む)
- 7 にぶい黄褐色(10YR4/2) 砂泥粘質土(微含む)
- 8 明黄褐色(10YR6/2) 砂泥粘土(微含む)
- 9 灰褐色(2.5YR5/2) シルト層 粘土
- 10 灰色(SY5/1) シルト混施砂
- 11 灰褐色と墨褐色(10YR5/1と7.5YR3/2)の混り やや粘りある砂質土 小石 Fe含む

第7図 第68トレント 井戸2平断面図



第8図 第68トレント井戸1、3平面図

井戸1(第8図)

調査区北端(標高52.900m~52.800m)で検出した。一辺0.9m前後の隅丸方形の掘形を有し、現状での深さは0.7mであった。耕作土層、砂層堆積層を除去した面で、第3遺構面よりも上部から埋没していた。上部堆積は暗灰色粘土で、検出面では長辺約1.3mの掘形をもつ。井戸枠は、方形縦板組の木枠であるが、検出時には土圧堆積や河川氾濫等により南側に向かって傾いていた。細い縦板や角材、板材などを組み合わせているが、やや粗雑な作りをみせる。その直下には、内側に曲物をはめて井戸枠構造が作られていた。曲物は直径0.4m、高さ0.26mである。曲物の外側には礫があり、曲物を設置した際に枠構造を保たせようとしたと考えられる。遺物は黒色土器等が出土している。

井戸3(第8図)

南北0.9m前後、東西が1.1m前後、隅丸長方形の掘形をもち、調査区中央南側で検出した。検出面の標高は53.300mで、深さは0.4mであった。掘形の埋土は黒褐色土と黄褐色土が混じる固く締まった土である。井戸枠は、検出面では一辺約0.6mで、底部に直径0.4mの曲物が高さ約0.

08m分のみ遺存していたが、本来は井戸1と同規模の曲物であったと思われる。曲物内埋土は砂礫土で、平瓦が出土した。井戸枠埋土から土師器皿の完形品が出土しており、井戸廃絶時に土師器を埋納したと考えられる

ピット

トレンチ西側中央部付近で30基、西側南端部付近で約30基を検出している。埋土の色調には茶褐色と黒褐色があり、上層からの掘り込みのピットも含まれる。時期不詳であるが、古代から中世の遺構と思われる。出土遺物には、土師器、須恵器、製塙土器等がある。

出土遺物(第9図～29図)

第68トレンチでは古墳時代の須恵器、土師器を中心に縄文時代から中世までの遺物が出土した。古代以降の遺物は少量で、古墳時代中期から後期におさまるもののが多数を占める。主要となるのは調査区南側の井戸と土坑群で、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、陶器、製塙土器、円筒埴輪、形象埴輪、瓦、石器(石鎚・削器)、木製品(木櫛、柵串、種子、紡績具、曲物)等がある。

土坑1(第9、10図)

須恵器壺蓋1～7、壺身10～21、有蓋高壺蓋8、壺22・23がある。19～21はヘラ描きを有する。高壺9は三角の透孔が穿たれ、瓶24底部の透孔は7ヶ所に復元することができる。他に土師器壺25～28、高壺29～33、壺34～41、瓶42が出土しており、25には穿孔が認められる。

土坑2(第11、12図)

須恵器壺蓋43～47、壺身48～62、高壺66、壺63・64がある。47・60～62にはヘラ描きが認められる。65はヘラによる穿孔を施しており、はそうと考えられる。この他、土師器壺67～70、高壺71・72、鉢73、壺74、瓶77・78、壺75・76・79～85がある。

土坑4(第13図、15図)

須恵器壺蓋86～90、壺身91～99、壺101がある。壺100はヘラ描きを有し、土師器壺107～109、高壺110～113、鉢114・115、壺119～121がある。瓶116は、底部の透孔が他のものに比して広く厚い。117・118は弥生土器壺である。

土坑5(第17図～20図)

須恵器壺蓋131～135・150～153、壺身136～144・154～157、有蓋高壺146、無蓋高壺147、はう148、壺149があり、131・156・157にはヘラ描きが施される。土師器壺158・159・178、鉢164～167、高壺160～161、壺168、壺169～176・179～183、瓶163・184が出土しており、184は透孔が広く梢円形に復元することができる。木製品185は中央に枘孔があり、紡績具と考えられる。150～157、178～185は下層出土である。

土坑6(第21図)

須恵器壺187、土師器壺189、高壺190、壺191・192、瓶193がある。191は下層から出土した。

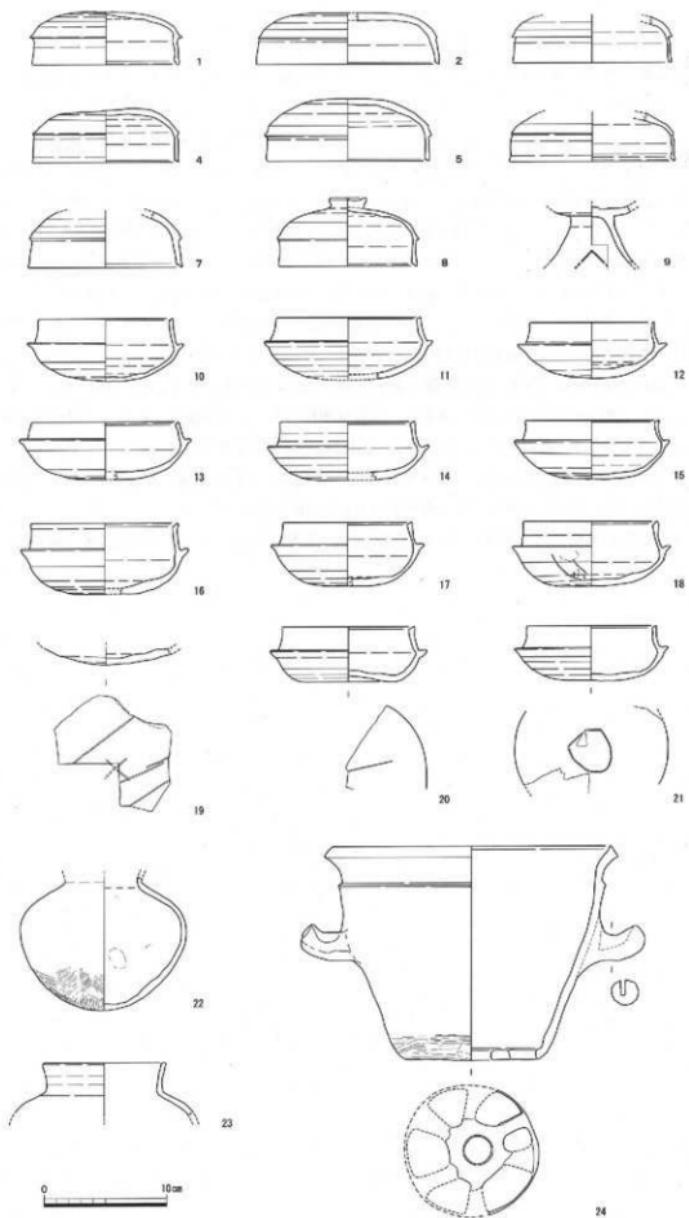
井戸2(第22～29図)

円筒埴輪194～208、土器209～219、木製品220～232がある。194・195は井戸枠に使用された

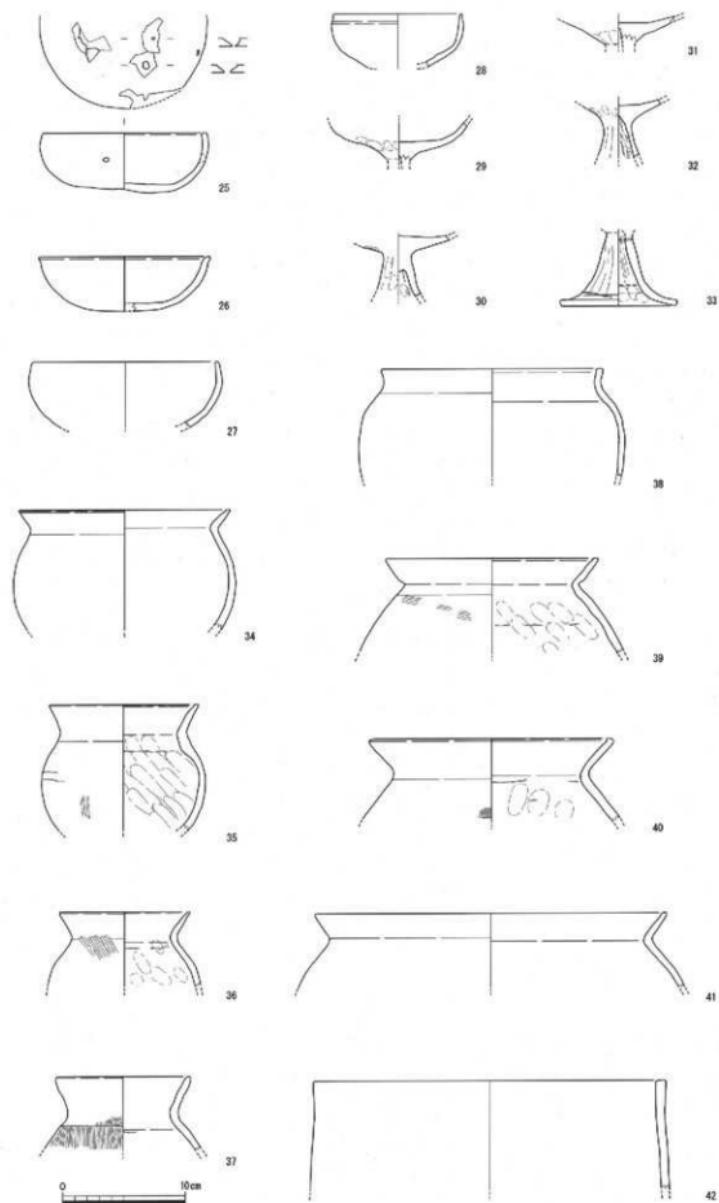
円筒埴輪で、その透孔や割れた隙間等に充てられた埴輪が196～203である。204～207は井戸枠内、208は掘形から出土した。194は口径50.4cm、器高127.0cmで、195は底径50.0cm、残存高50.9cmである。199～203は194の透孔を塞ぐために、196～198は195の透孔および欠損部を補強するために充てられていた。197と198、201～203が各々同一個体である。208にはヘラ描きがある。このほかにも堀形には円筒埴輪が多く含まれており、少なくとも5点以上を、井戸構築の際に用いたことがわかる。これらの円筒埴輪は直径50.0cm前後であり、井戸枠に使用された194と同規模の埴輪と推測できる。また、粗い刷毛工具を使用し、成形には第1次調整が消されずそのまま第2次調整を施すなど、粗雑な作りをみせる。土器類は井戸枠下層から土師器壺215・216、壺217、須恵器壺218、壺219、掘形からは須恵器壺212、土師器壺213が出土した。この他、須恵器壺209、はそう211、土師器瓶214がある。木製品220～232は井戸枠内最下層から出土したもので、220～228が斎串、229～231が木鎌である。220～224は全長12.5cm～14.0cm、幅1.2cm～1.8cmで、225～228は端部のみの遺存であるが、同様な規模であったと推測している。木鎌は2種確認することができ、229は厚みがあり、230・231は細く扁平に製作されている。

このほか図示していないが、土坑や耕作土層、素掘溝から円筒埴輪、形象埴輪が出土した。円筒埴輪は井戸2の井戸枠と同等の直径50.0cm前後の規模をもつものがある。

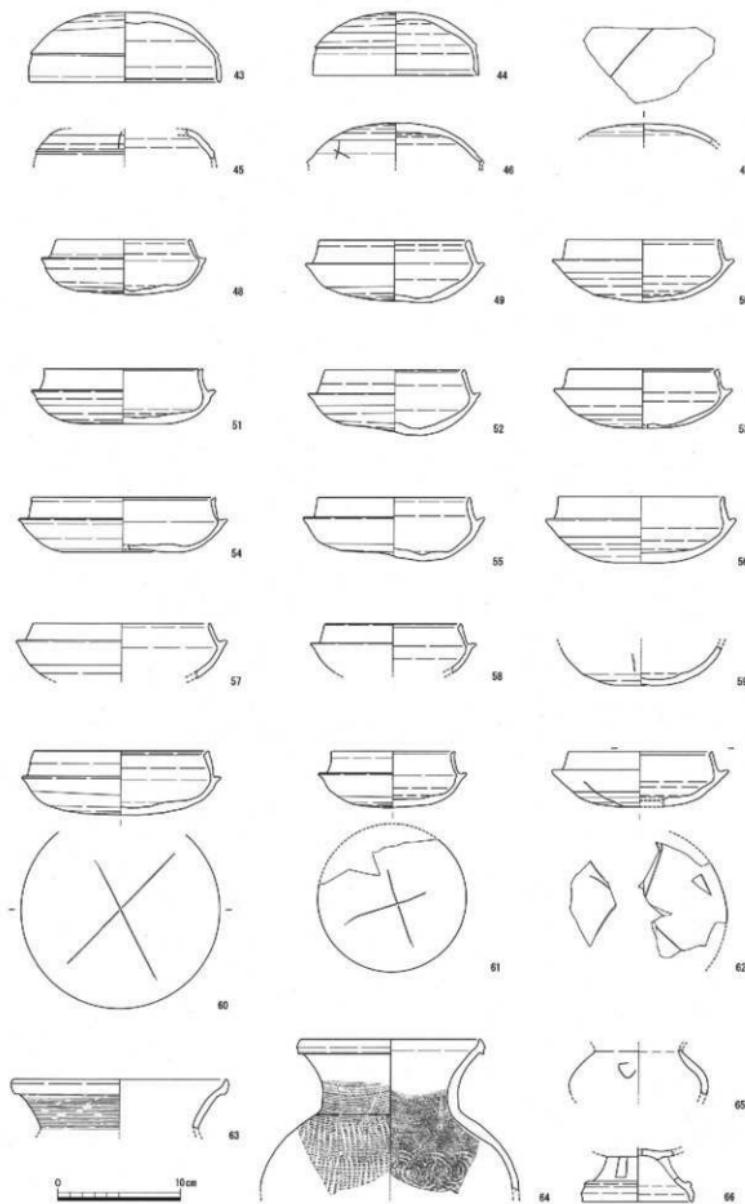
平安時代の遺構の出土遺物には、井戸1の黒色土器碗がある。井戸3は土師器皿、縄目の平瓦がある。



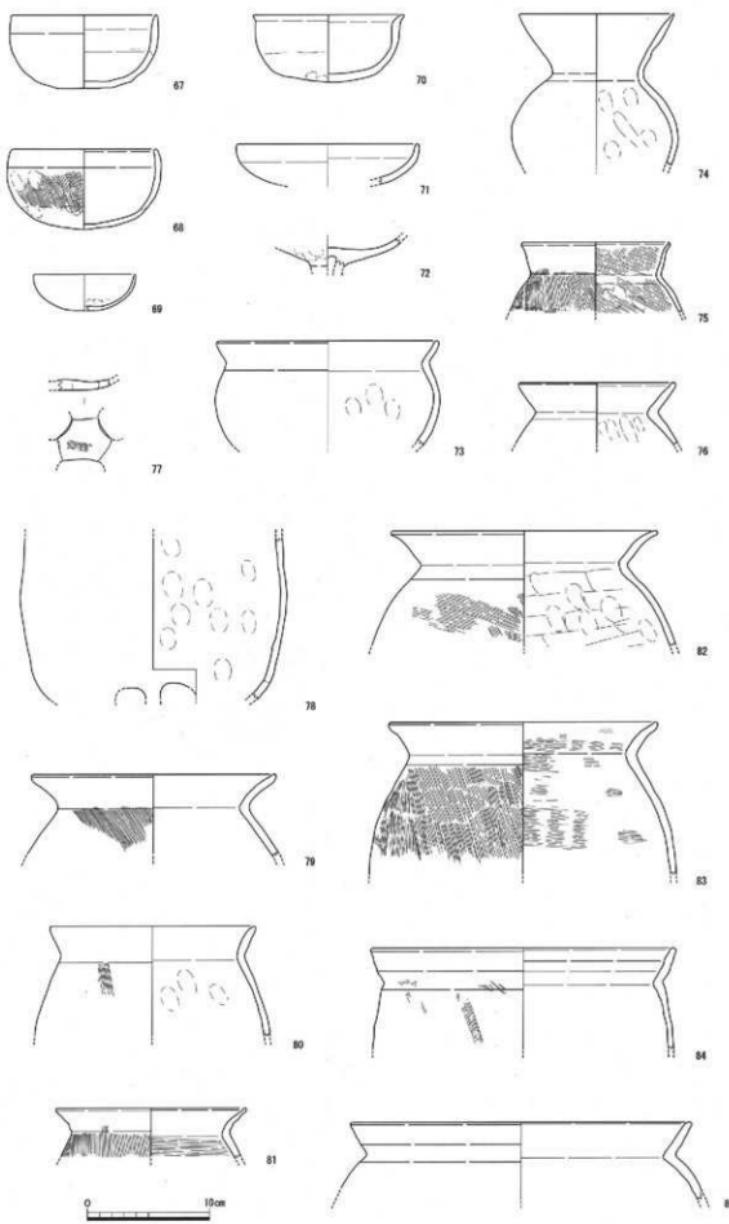
第9図 第68トレンチ土坑1出土遺物1



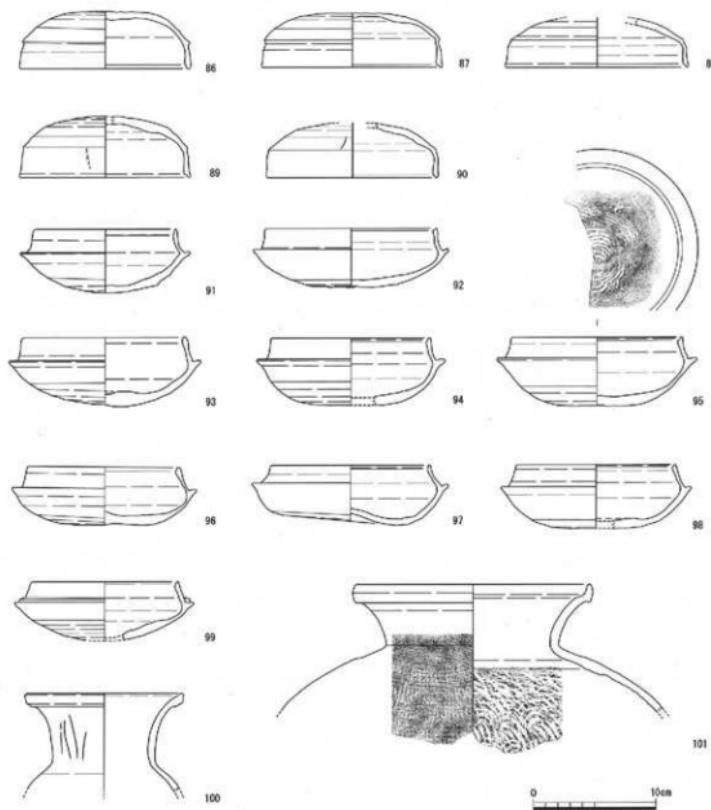
第10図 第68トレント坑1出土遺物2



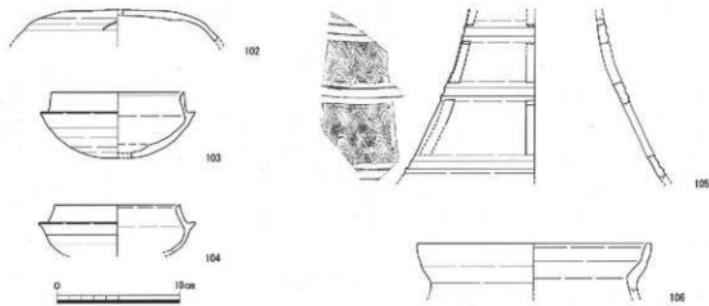
第11図 第68トレンチ土坑2出土遺物1



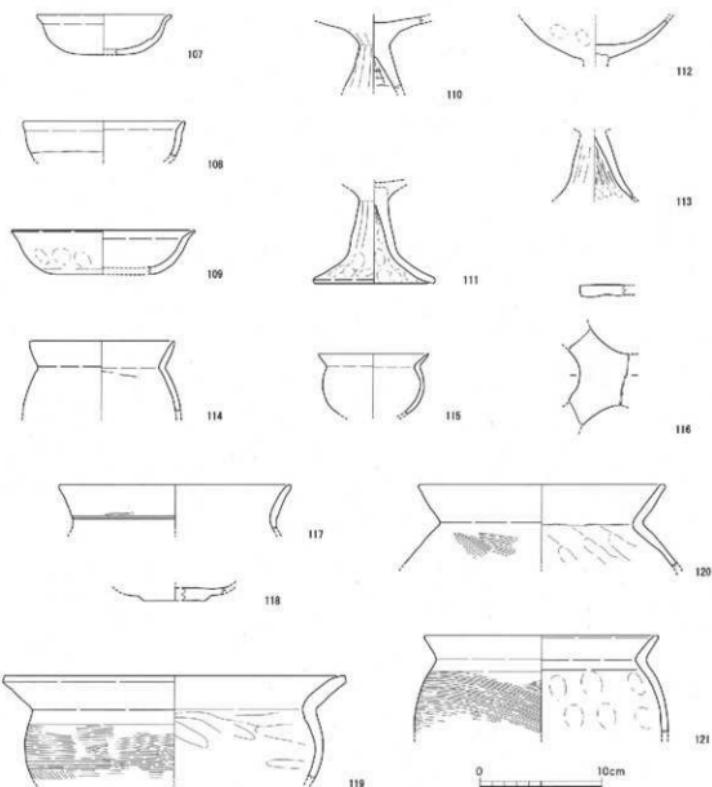
第12図 第68トレンチ土坑2出土遺物2



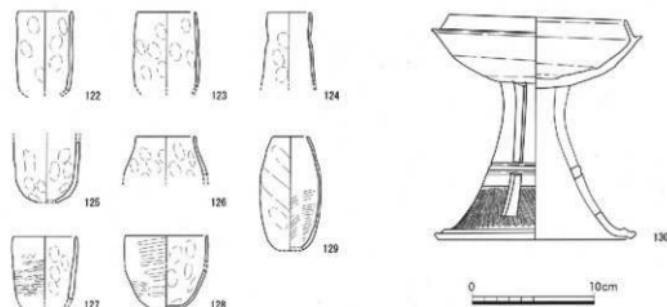
第13図 第68トレンチ土坑4出土遺物1



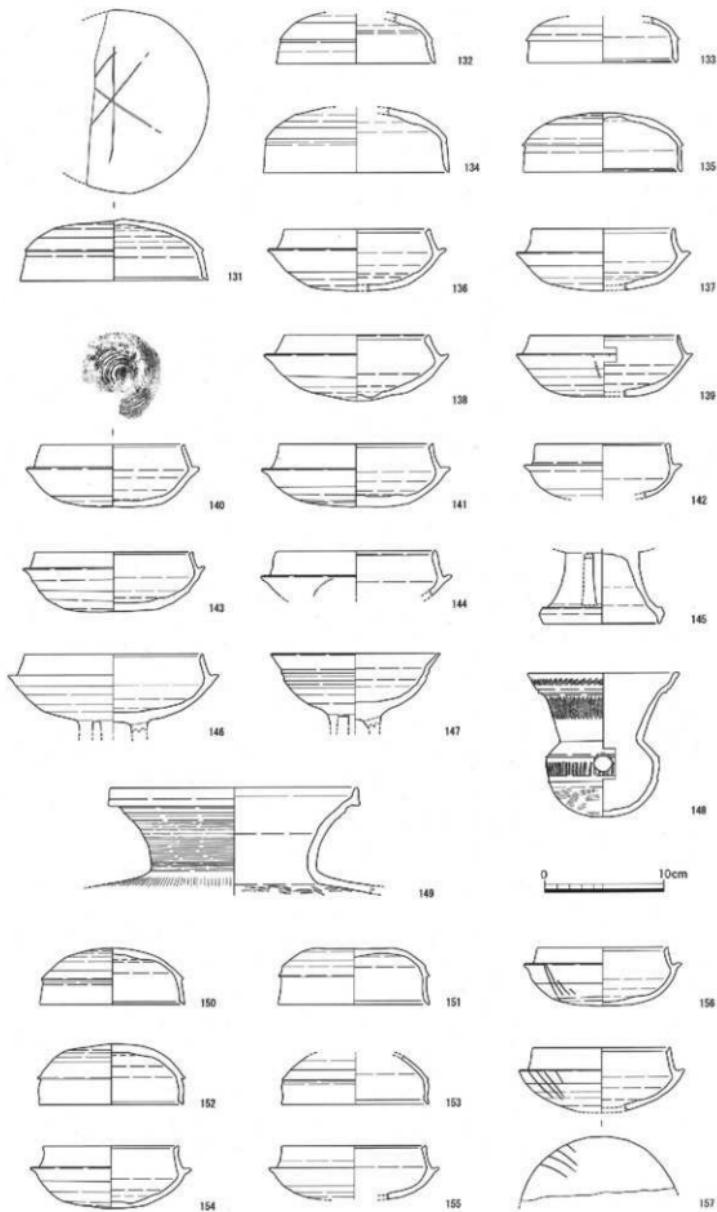
第14図 第68トレンチ土坑3出土遺物



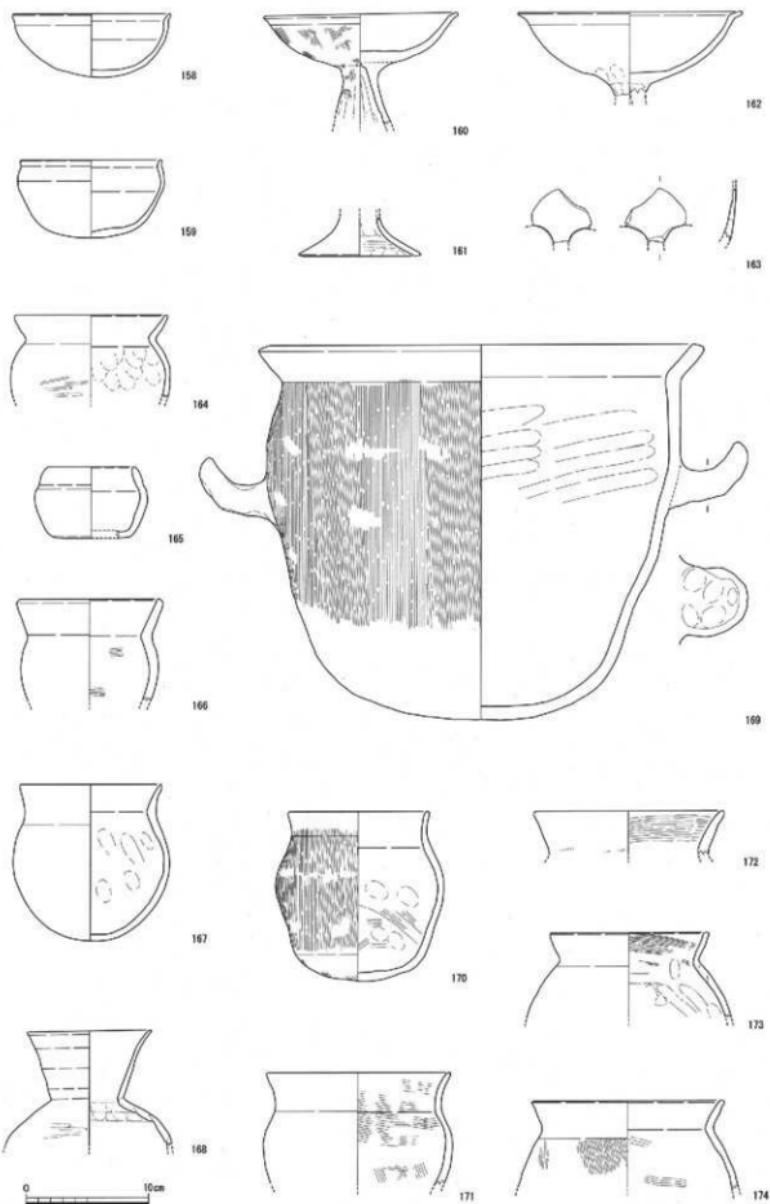
第15図 第68トレンチ土坑4出土遺物2



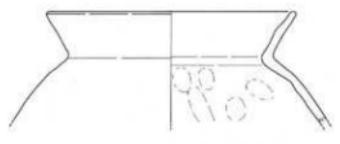
第16図 第68トレンチ各道構出土製塙土器、溝2出土遺物



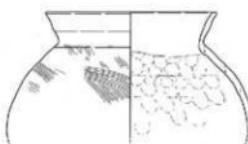
第17図 第68トレンチ土坑5出土遺物1



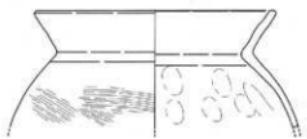
第18図 第68トレンチ土坑5出土遺物2



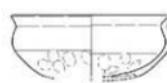
175



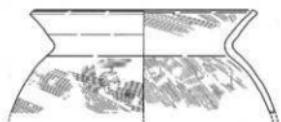
177



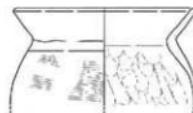
176



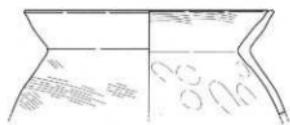
178



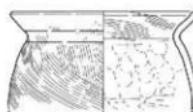
179



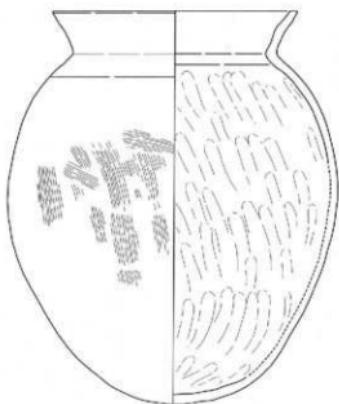
181



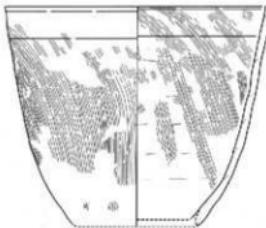
180



182



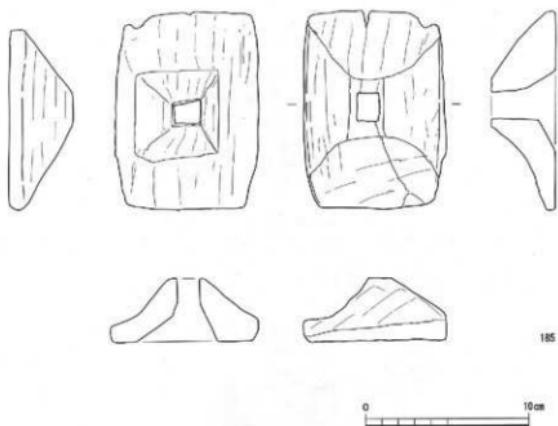
183



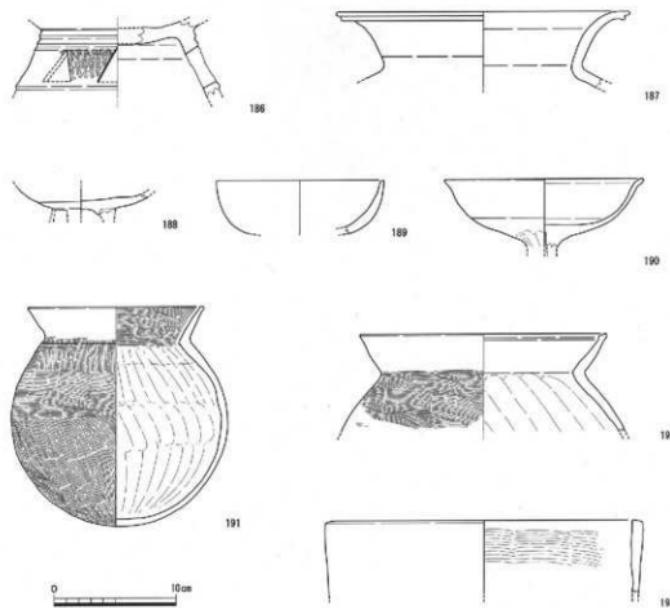
184



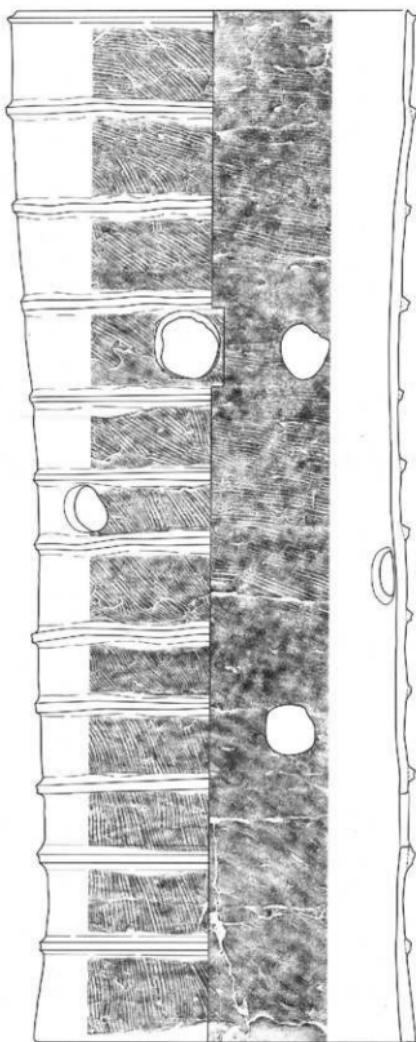
第19図 第68トレンチ土坑5出土遺物 3



第20図 第68トレンチ土坑5出土遺物4



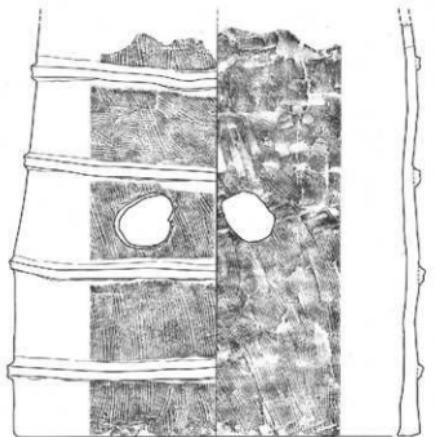
第21図 第68トレンチ土坑6出土遺物



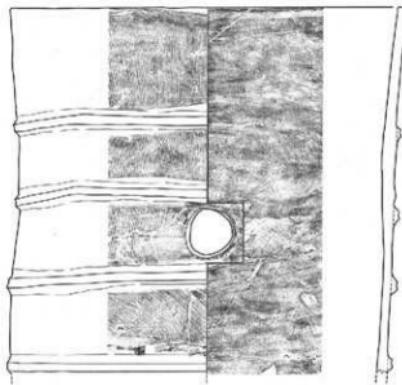
194

0 20cm

第22図 第68トレンチ井戸2出土遺物1



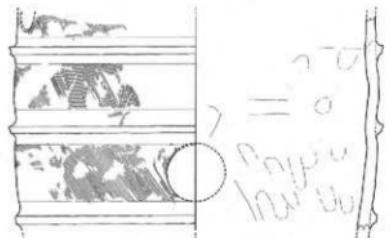
195



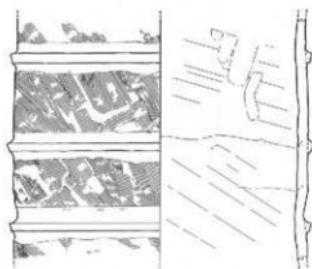
196



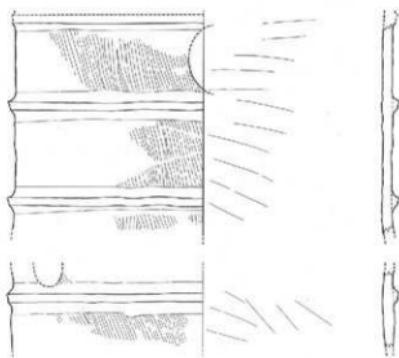
第23図 第68トレンチ井戸2出土遺物2



197



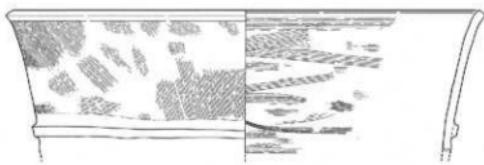
198



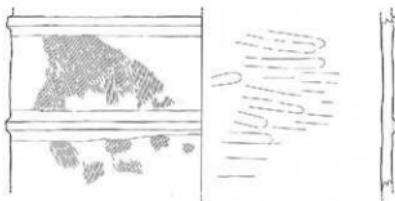
199



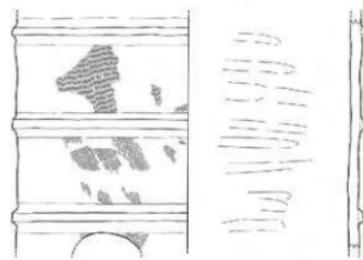
第24図 第68トレンチ井戸2出土遺物 3



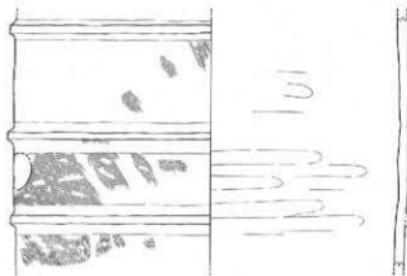
200



201



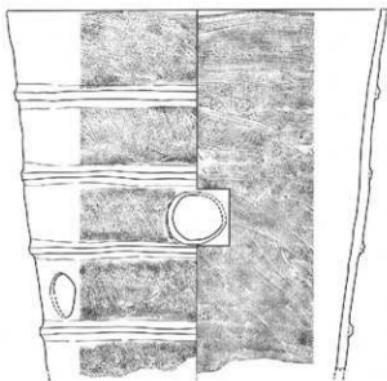
202



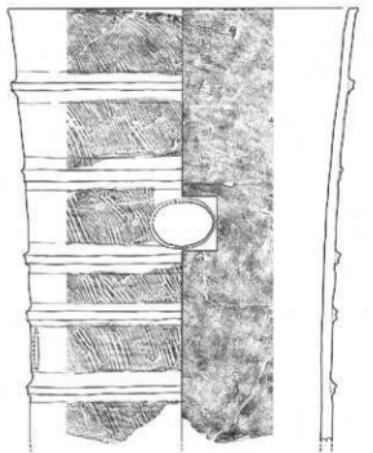
203



第25図 第68トレンチ井戸2出土遺物4



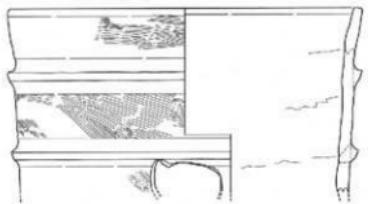
204



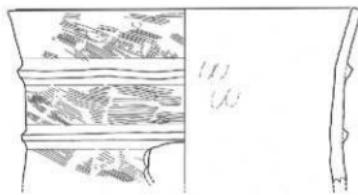
205



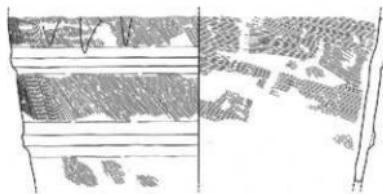
第26図 第68トレンチ井戸2出土遺物5



206



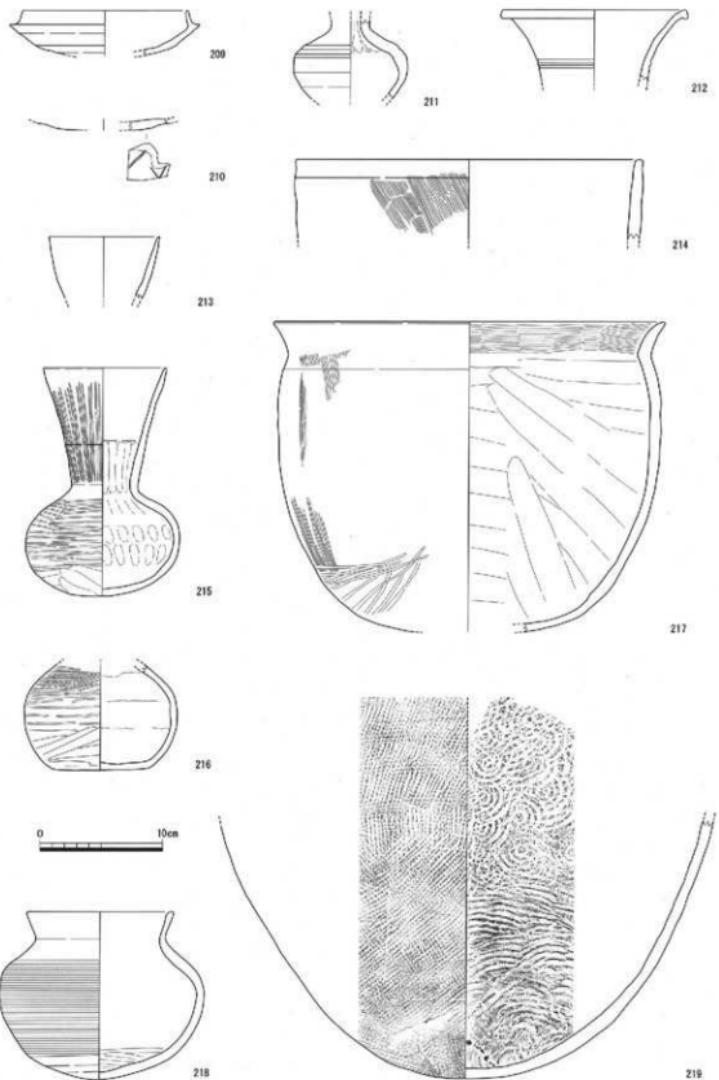
207



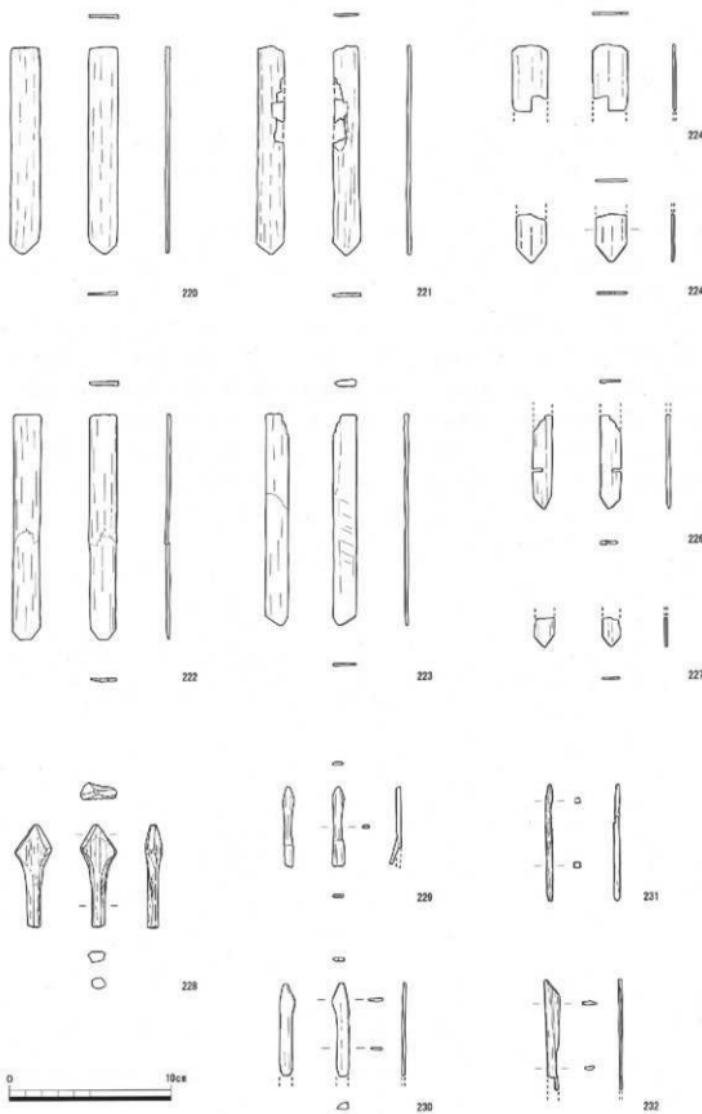
208



第27図 第68トレンチ井戸2出土遺物6



第28図 第68トレンチ戸2出土遺物7



第29図 第68トレンチ井戸2出土遺物 8

二. J 地区

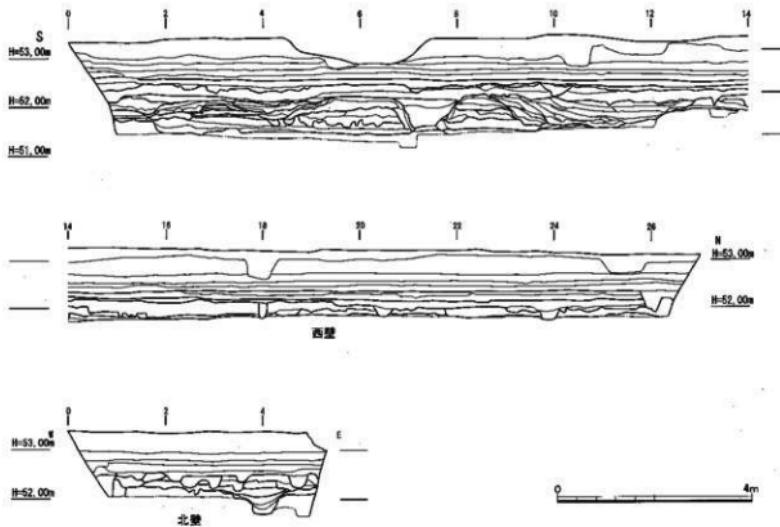
第69トレンチ(第30図、31図)

調査地は事業地の最も東北隅にあたり、旧メリヤス工場の跡地である。区画道路敷設予定地を調査対象とし、幅5.5m、全長27.3m、面積150.0m²のトレンチを設定した。

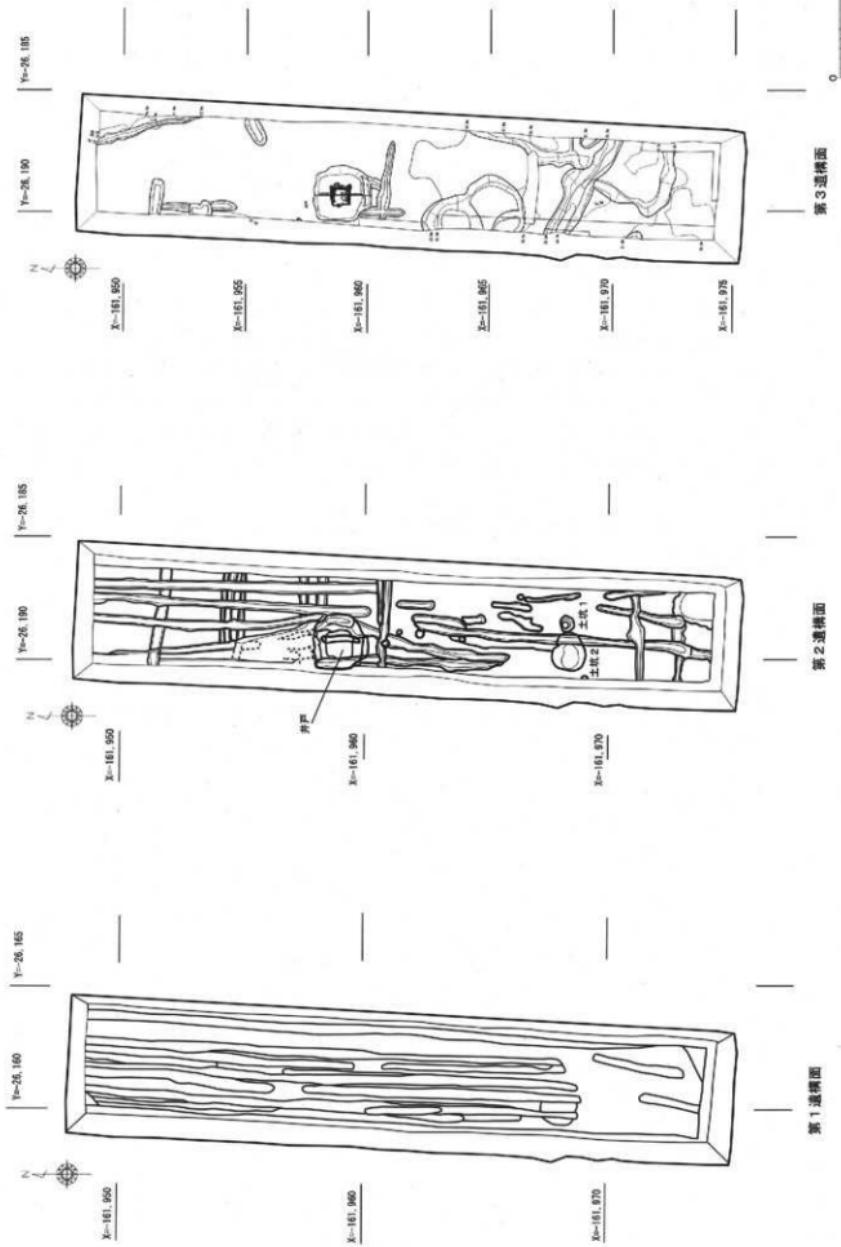
基本層序

上から順に旧工場の整地土、盛土、現代(旧)耕作土、灰茶色砂質土、黒褐色粘質土、茶灰褐色粘土、黄褐色粘質土および砂質土～青灰色粘土である。南側には茶灰色砂質土および下層の砂層が堆積していた。

調査地は幾度となく耕作が繰り返されており、重機で旧工場の整地土、盛土、現代(旧)耕作土、旧耕作土を除去した面を第1造構面として調査を開始した。第1造構面で南北方向の素掘小溝を検出、掘削したのち、第1造構面ベースの黒褐色粘質土を除去して現れた面(茶灰褐色粘質土上面、標高52.200m)を、第2造構面とした。この造構面では、南北方向の素掘小溝と、下層造構として主要な造構を検出した。両造構面ともに、トレンチの北半と南半では土層の堆積状況がやや異なり、南半は砂混じりの土層堆積を示していた。井戸以外を完掘したのち、黄褐色粘質土上面(第3層上面、ベース面)を第3造構面として造構検出作業を行った。



第30図 第69トレンチ西壁、北壁断面図



第31図 第69トレンチ 各遺構而平面圖

遺構

第1遺構面

黒褐色粘質土上面(標高52.400m～52.200m)で、南北方向に幾重にも重なって走る素掘小溝を検出した。また、部分的に露出していた第2遺構面上で土坑2を検出した。南半には砂を多く含む茶灰色砂質土および下層の砂が堆積しており、明確な素掘小溝を検出し得なかった。出土遺物は土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦、石器等で、古墳時代の遺物もあるが、平安時代のものが多く出土している。

第2遺構面

灰褐色粘質土上面(標高52.200m)で、東西、南北方向に走る素掘小溝にくわえ、やや東に斜行する南北素掘小溝を検出した。南半は茶灰色砂質土、およびその下層にあたる砂層が拡がっており、その上面でも素掘小溝を検出した。第1遺構面から第2遺構面の間でも耕作を繰り返していることがわかる。また、主要な遺構としてピット6基、土坑2基、井戸1基を検出した。これらは主に平安時代の遺構であることから、埋没したのちに中世以降は耕作地となったことがわかる。出土遺物は土師器、須恵器、黒色土器、瓦、石器等で、平安時代のものが多い。

ピット

調査区中央から南側で6基検出した。平面円形で一辺0.2m～0.3m、深さ0.1m～0.2mの規模である。礫を根石にしたものもあるが、調査区内では建物にはならない。時期は平安時代から中世と思われる。

土坑1(第33図)

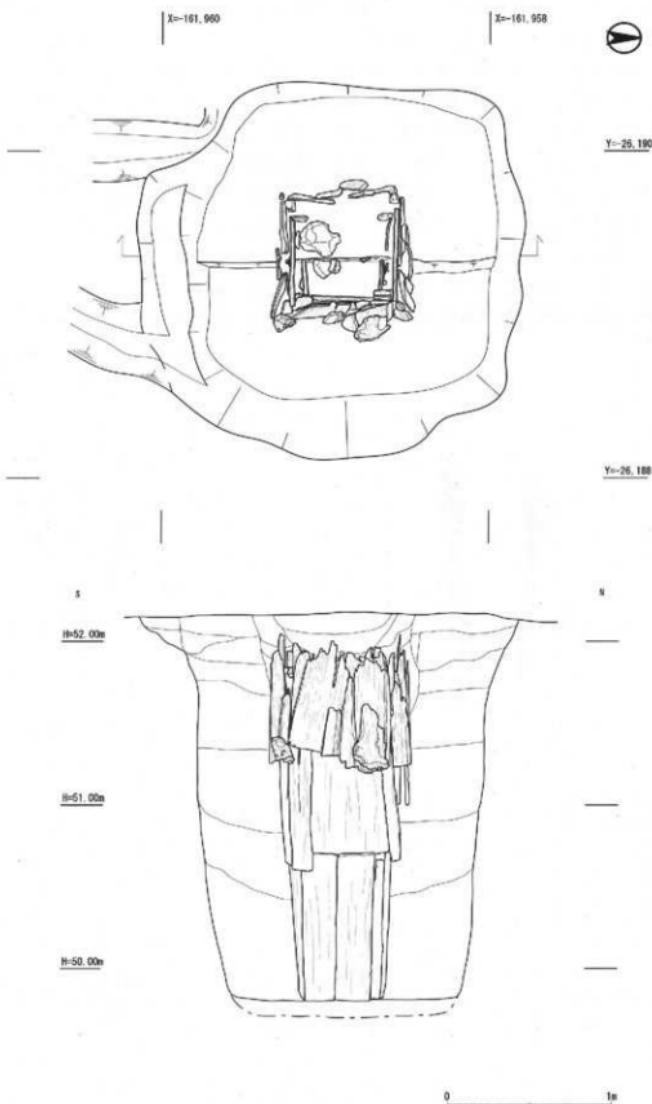
調査区南半(標高52.300m前後)で検出した、一辺0.6m前後でやや横長の梢円形平面をもつ、深さ0.3mの遺構である。底を打ち欠き、口縁を下にして埋置された羽釜が出土した。遺構は砂層を切り込んでおり、土器の出土状況から水溜めとしての機能が想定される。羽釜の内側から黒色土器B類椀や土師器が出土しており、平安時代(10世紀後半)の遺構である。

土坑2

第1遺構面(標高53.100m付近)において土坑1の西側で検出した、平面梢円形を呈する南北1.4m、東西1.6m、深さ0.55mの遺構である。当初井戸と想定していたが、自然堆積した状況を看取できること、井戸と思われる構造が確認できなかつたことから土坑と判断した。出土遺物は土師器で、平安時代の遺構と考えている。

井戸(第32図)

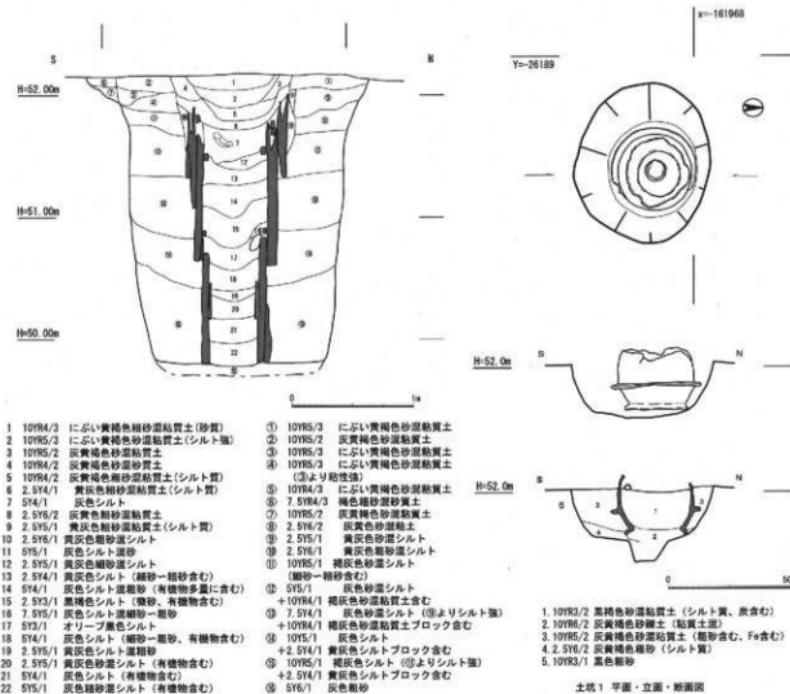
トレンチ中央西側で検出した。隅丸方形の平面プランで、規模は一辺2.3m、深さ2.4mである。最上層の一部は第2遺構面で検出した南北素掘小溝により削平を受ける。井戸枠は二段になっており、上部構造は方形縦板組横棟留で、最上部は縦板が二重に立てられ、外枠は一辺0.8m、内枠が一辺0.7mである。外枠に用いられた板材は幅0.1m～0.5m、長さ0.4m～0.8m、厚さ0.05m、外枠最上段の横棟(北側)は長さ0.6m、厚み0.04m～0.06mである。枠内側の構造材には長さ1.0m～1.2m、一辺0.05m～0.2m、厚み1.0m～4.0mの厚い木板を用いるが、厚み0.05mのやや薄い板材も挿入されている。上部構造の井戸枠内寸は0.55m前後である。内枠の縦



第32図 第69トレンチ井戸平面図、立面図

隅柱は上下二ヶ所に枘孔を切っており、横桟二段で支える構造になっている。内側西南隅の支柱と下段の横桟とが組合う状況が確認できた。

下部構造は、一辺約0.5mの梢円形に削り抜かれた丸太を用いて構築され、やや材の足りない部分に木板を嵌め込んで枠を補強している。内法は0.4m余りである。削抜き材は標高51.600m～51.700mであるが、上部構造で調整したため、さほど大きな差にはならなかったようである。井戸枠の高さは0.9m前後で、北側のほうより遺存度が高く、表面に施された面取りを確認することができる。さらに、削抜き材の内側中央には曲物(標高51.450m前後)が設置されていた。曲物の規模は一辺0.4m、高さ0.3mで、その下に構造物は存在しなかった。この曲物もまた、井戸機能を保つために設置されたと思われる。枠内の埋土は、検出面から0.7m以下に有機物を含む粘土と砂が堆積し、土器類、須恵器、黒色土器などの遺物が出土した。これらとともに、木製の小さな曲物容器や横櫛等の遺物が出土した。10世紀後半の遺構と考えている。



第3遺構面

黄褐色粘質土～砂質土(第Ⅲ層上面、標高52.000m前後)であり、トレンチ北半は安定した基盤層(ベース層)が拡がっていた。中央付近からやや南に向かって地形が下がっており、南端の標高は51.800mである。北東隅で東西幅0.8m、深さ0.3mの自然流路を検出し、中央付近の西側には落ち込みが拡がる。これは地形の落ち込みであり、埋土は茶灰色砂質土である。その南側で幅約1.0m、深さ0.3mの、北西から南東へ抜ける自然流路を検出した。この落ち込みと自然流路の間に、ベース層が高まりをみせる。その下層に旧流路を検出した。第2遺構面で露頭していた砂層と思われる。旧流路は東南部分に砂層が堆積しており、かつ低くなっている。

出土遺物

第69トレンチでは、古墳時代から中世の土師器、須恵器、黒色土器、製塙土器、瓦器、瓦、木製品、石器が出土した。これらの多くは耕作土層に包含されていたものである。

土坑1

集水のために枠として設置した羽釜と、黒色土器がある。羽釜は口径23.6cm、残存高22.6cmである。羽釜内の黒色土器はB類椀が出土した。土坑2出土遺物は、土師器皿がある。

井戸

掘形から土師器の壺、皿、須恵器壺蓋、黒色土器椀が出土している。また、上部構造の井戸枠内から土師器壺、皿、甕、黒色土器椀が、下部構造からは土師器皿、甕、羽釜、黒色土器椀、皿が出土した。木製品は、曲物、横櫛がある。曲物は一辺15.8cm、器高6.8cmと小さいもので、横櫛は両端が遺存しておらず全幅は不明である。

第70トレンチ(第34図、35図、第1表、2表)

区画道路予定地上でL字形のトレンチを設定した。また、南北トレンチ部北端において、方墳の周濠を検出したことから拡張調査を行った。調査面積は拡張部を含めて620.99m²である。当該地盤はかつて靴下工場が建っていた場所で、建設時および取り壊し時に激しく擾乱を受けしており、特に取り壊しの際に出たと思われるコンクリート塊などが大量に埋められていた。擾乱はトレンチ全面にわたって拡がっており、その深度は最大で2.7mを超える。トレンチの東西方向部分はこの擾乱による破壊が特に著しく、旧河道以外に目立った遺構を検出することは不可能であった。

基本層序

現地表面の標高は低いところで53.300m、高いところで53.800m。基本層序は、表土および第I層、第II層、第III層に分けられる。表土、第I層は近代以降の整地および盛土層で、厚さは0.8m~1.4mである。第II層は中世の耕作土層ユニットであるが、断面観察から少なくとも3面の耕作面を確認することができた。調査はその3面について行い、第1遺構面から第3遺構面とした。層厚は0.4m~0.8mである。第III層は基盤層であり、第4遺構面として調査を行った。

遺構

第1遺構面(第II層)

遺構は耕作に伴う素掘小溝と杭穴のみで、遺物も皆無に近く土師器、黒色土器の極小片が僅かに出土したのみであった。

第2遺構面(第II層)

第1遺構面と同様である。

第3遺構面(第II層)

主要な遺構は上記2遺構面と同じく素掘小溝と杭穴で、遺物も非常に少量である。ただし素掘小溝に関して、この面では上層で検出したものと同様のものにくわえ、幅0.3m~0.5m、深さ0.24m~0.48mの、正方位にのる東西溝を3.5m間隔で複数検出した。このほかに、東西方向の流路状に窪んだ地形の底部で土器溜まりを検出した。

SX01(第36図)

西から東へ抜ける流路状の地形内で検出した、直径約0.4mの平面円形を呈する土器溜まりである。最大部直径約0.4mの須恵器甕が埋められており、その内部および周辺に土師器片が散在していた。これらの土器片は西から東へ向かって帯状に分布しており、浅い自然流路内に須恵器の甕を設置し、その内部に土師器片を納めていたと考えられる。

第4遺構面(第III層)

東西部中央から南北部南半にかけて、南東から北西へ向かって流れる河道の東肩を確認した。また、南北トレンチ北端部において、南で西へ向かって緩やかに曲がる南北方向の溝を検出した。その埋土を掘削したところ、底部から組合式木棺の底板が出土したことから、トレンチを拡張

して遺構検出を行った。その結果、この溝を周濠とする方墳の存在が明らかになった。これを受けて、この古墳を下田東2号墳とし、第1次調査で検出された下田東古墳を下田東1号墳と改称することとした。

下田東2号墳(巻頭図版1、第37図～40図)

墳丘裾部が一辺8.0mの方墳である。周濠の幅は北側で2.7m以上、木棺が出土した東側は2.6m、西側は2.2m、南側で1.5m～1.9m、深さは0.45m～0.5mであった。したがって、周濠を含めた古墳全体の規模は東西12.8m、南北12.6m以上になる。墳丘は既に削平されており、主体部の痕跡、副葬品等は確認することができなかった。なお墳丘頂は、検出した主体部上面から1.7m前後の高さであったと推定される。

周濠を検出した時点では墓坑の掘形、および木棺材の抜取り痕跡は観察されなかった。くわえて、周濠内の埋土は木棺が出土した東側、他の三方とも自然堆積によるものであり、時期差は認められない。すなわち、平面、断面ともに墓坑掘形あるいは木棺の抜取り痕跡は観察されなかった。また、木棺底板直下から、5世紀後半に比定される須恵器の壊身2点と壊片4点が出土している。これらの須恵器は原位置を保っているものと見られ、底板と同時期に周濠内に置かれた可能性が考えられる。ただし、土器内に遺物は含まれていなかった。

これらの状況および木棺底板の年代測定結果から、古墳の築造時期は5世紀後半と想定される。周濠の埋没時期は、埋土に黒色土器が僅かではあるが含まれることから平安時代と思われるが、主体部の削平時期は不明である。したがって、この木棺が周濠内に置かれたのは5世紀後半であり、濠が埋没する時点では既に底板のみになっていたと考えられる。あるいは、当初から底板のみであった可能性も排除できない。

出土遺物(第41図～44図、第3表)

大半が第II層埋土あるいは素堀小溝内からの出土であり、遺構に伴うものは極少数である。第II層包含遺物で目立つものは馬齒(第42図-234)、須恵器の小壺(第42図-235)である。また、旧河道から土師器壺1点(第42図-236)、須恵器の壊身2点(第42図-237、238)が出土している。

SX01

239は土師器の大型高壺、240は須恵器の大型壺である。

下田東2号墳

木棺底板(第41図)

樹種は高野櫟で、板目取りの板材を使用している(第43図)。年輪年代測定およびAMS-¹⁴C年代測定を行ったところ、前者では449年、後者では415年(中心値)という結果が得られた。年輪年代測定の結果から、木棺材の伐採年代は遅くとも450年と考えられる。全長約290.0cm、幅は広端部で65.2cm、狭端部で49.0cm、厚さは広端部で10.0cm、狭端部で7.5cmである。側板があたる部分は幅8.7cm～11.1cmで、0.6cm～1.0cmの段差を付けている。小口板を落とし込むための小溝部分は広端側が長辺54.5cm、短辺11.6cm～13.0cm、深さ1.8cm～2.0cm、狭端側は長辺40.5cm、短辺9.8cm～11.8cmで0.8cm～1.2cmの深さに削り込む。特筆すべきは、繩掛け突起状の造

り出しが短辺の両端に2本ずつ、計4本を完全な形で残している点である。これらは、広端部のものが長さ18.5cm、厚さ6.5cmと長さ20.0cm、厚さ8.4cm、狭端側は長さ17.0cm、厚さ5.3cmと長さ18.0cm、厚さ5.6cmで、広端部の1本を除き、側板がのるほぼ延長線上に付けられている。

内寸は全長が194.0cm、広端幅(頭側)が45.0cm、狭端幅(脚側)が33.0cmで、長短比は各々1:0.231、1:0.170となる。また、広端幅と狭端幅では1:0.733である。これらの数値と、大和高田市三倉堂遺跡出土の各木棺および大阪府土保山古墳1号木棺の内寸比を比較すると、第4表のようになる。今回出土のものを含め、全長に対し広端幅は21.6%~27.6%、狭端幅は17.2%~25.7%、深さは広端側が13.6%~21.1%、狭端側は12.6%~21.1%となる。富木車塚古墳前方部第Ⅲ主体部、後円部第Ⅲ主体部の木棺痕跡についても長短比は同様の傾向にあり、土保山古墳2号木棺、富木車塚前方部第I、第II主体部の出土例もまた、近似値を示している。

構造的に当木棺に近いと思われる三倉堂4号木棺は、内寸全長180.0cm、広端幅42.0cm、狭端幅31.0cmで長短比が1:0.233、1:0.172、広端幅と狭端幅では1:0.738である。両端が腐蝕して失われているために外寸は不明であるが、内寸においては今回出土の底板とはほぼ同規模であり、長短比および広端幅と狭端幅の比率についても近似した数値を示す。また、木棺の深さは広端部、狭端部とも38.0cmで内寸全長との比率は1:0.211となる。これらをもとに下田東2号墳出土木棺の深さを復原すると、広端側で40.7cm~42.0cm、狭端側で40.5cm~42.0cmという数値を得ることができる。また、三倉堂3号木棺についても、内寸の寸法比において比較的近い数値が求められる。これは、木棺全体の規模、構造の差違に関わらず、内部空間すなわち遺骸を納めるスペースについては一定の規格が存在した可能性を示唆するものと思われる。

構造については、底板以外の部材が出土していないため詳細は不明であるが、既知の組合式木棺の中仕切り板を小口板とし、底板のものと対になる突起をもった蓋を組み合せたと推定される。ただし、今回出土した底板の突起部分には縄を掛けた痕跡は残っておらず、部材を造ったものの、木棺として組み立てられることが無かったとも考えられる。

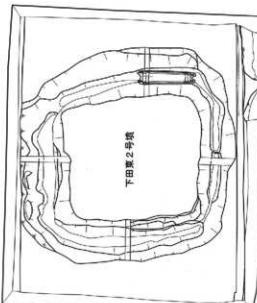
須恵器(第42図-242~247)

木棺直下から壺身2点、壺蓋4点が出土した。これらはTK23~TK47に相当する。

土師器(第42図-241)

南周濠中央部の濠底部から丸底壺1点が出土している。

第34図 第70トレント子母橋平面図



X=161.020 Y=26.150

X=161.020 Y=26.130

X=161.020 Y=26.120

X=161.020 Y=26.110

X=161.020

X=161.020

X=161.020

X=161.020

X=161.020

X=161.020

X=161.020 Y=26.140

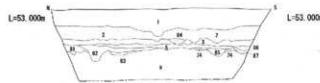
X=161.020 Y=26.120

X=161.020 Y=26.110

X=161.020 Y=26.110



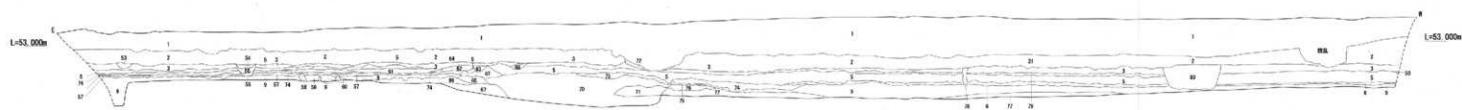
東壁



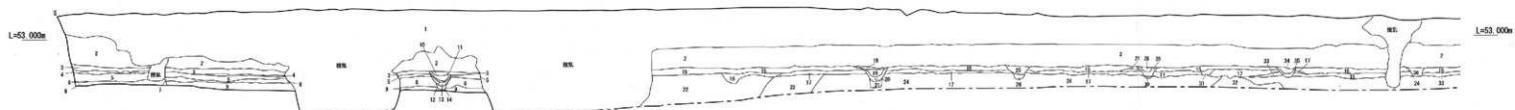
北壁



南壁



西壁



0 4m

第35図 第70トレンチ 東壁、西壁、南壁、北壁断面図

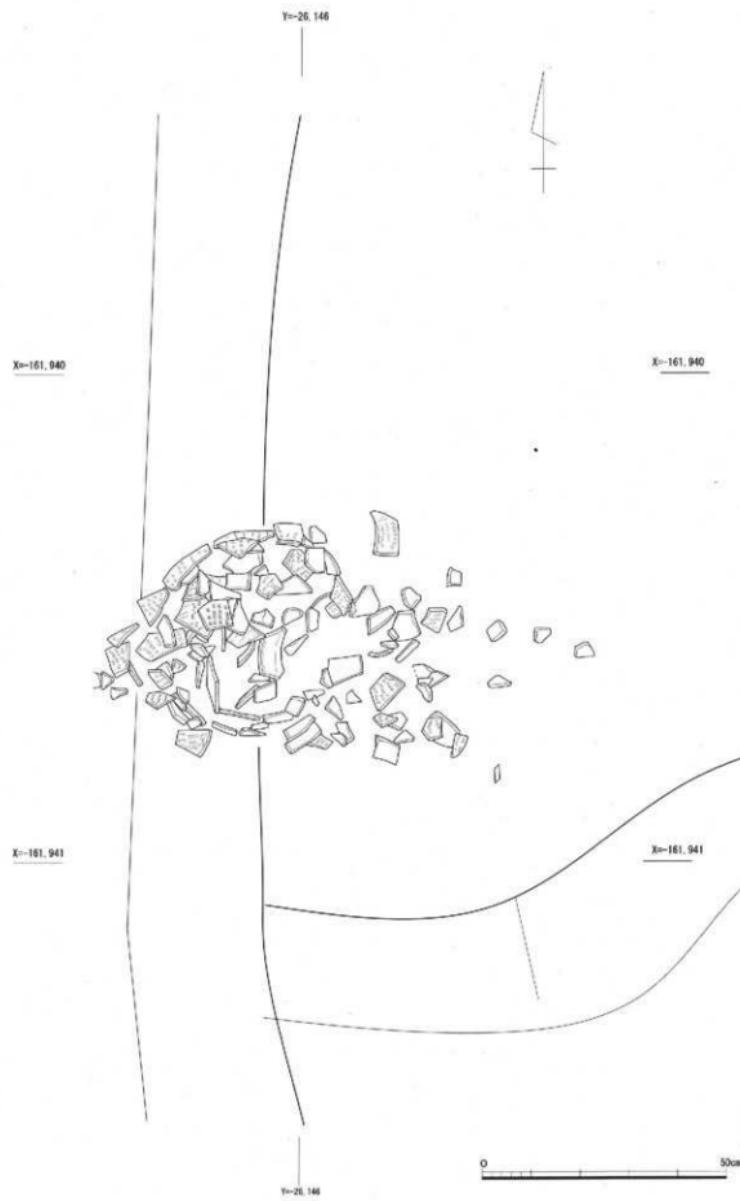
第1表 第70トレンチ北壁土色

層番号	土色	土質
1	表土	
2	7.5YR 3/1	黒褐色弱粘質土 やや砂質 Mn含む
3	2.5Y 5/2	暗灰黄色砂質土 Fe含む
4	10YR4/2	灰黃褐色弱粘質土 粗砂、Mn含む
5	10YR3/4	暗褐色粘質土 Mn、炭化物細片含む
6	10YR3/3	暗褐色弱粘質土 Mn含む
7	10YR3/2	黒褐色粘質土 Mn、炭化物細片含む
8	10YR3/1	黒褐色粘質土 粘土に近い粘り 炭化物細片含む
9	7.5YR4/3	褐色粘質土 Mn含む(地山)

第2表 第70トレンチ 西、南、東壁土色

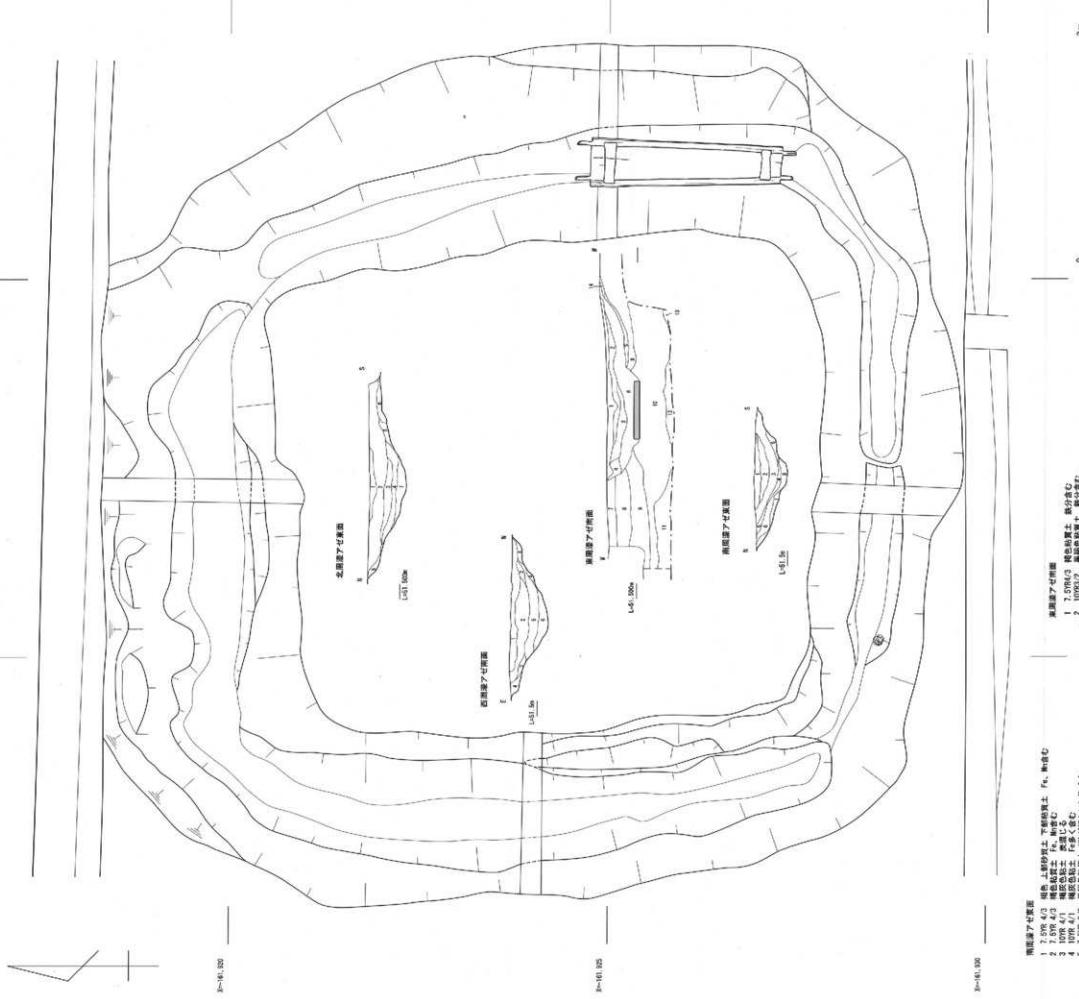
層番号	土色	土質
1	表土	
2	盛り土	
3	10YR4/3	にぶい黄褐色砂質土 Mn含む
4	7.5YR4/4	褐色弱粘質土 Mn含む
5	10YR4/2	灰黃褐色砂質土 Mn、纖維含む
6	10YR3/1	黒褐色粘質土 Mn、砂粒含む
7	10YR3/2	黒褐色弱粘質土 やや粘り強い Mn、炭化物含む
8	10YR3/4	暗褐色弱粘質土 Mn、Fe含む
9	10YR3/2	黒褐色粘質土 Mn、Fe含む
10	10YR4/3	にぶい黄褐色弱粘質土 Mn含む
11	10YR4/2	灰黃褐色土 Mn含む
12	10YR4/2	灰黃褐色砂質土 Mn、Fe含む
13	10YR4/2	灰黃褐色弱粘質土 Mn、Fe、砂粒含む
14	7.5YR4/4	褐色弱粘質土 やや粘り強い Mn、Fe含む
15	7.5YR3/1	黒褐色弱粘質土 やや砂質 Mn含む
16	10YR4/2	灰黃褐色弱粘質土 Fe多量に含む
17	10YR4/4	褐色砂質土 Mn含む
18	7.5YR4/3	褐色砂質土 Mn含む
19	7.5YR4/4	褐色弱粘質土(やや砂質) Mn含む
20	10YR4/2	灰黃褐色弱粘質土(やや砂質) Mn含む
21	7.5YR4/6	褐色粘質土(やや砂質) Mn、炭化物含む
22	10YR6/2	灰黃褐色砂粒
23	2.5YR4/2	暗灰黄色 きめ細かい砂質土(やや粘りあり) Fe多量に含む
24	7.5YR4/3	褐色粘質土 Mn含む(地山)
25	10YR4/2	灰黃褐色土 やや砂質 Mn含む
26	10YR4/2	灰黃褐色弱粘質土(やや粘り強い) Mn含む
27	10YR4/2	灰黃褐色砂質土
28	10YR4/2	灰黃褐色弱粘質土(やや砂質) Mn含む
29	10YR4/1	褐色弱粘質土 Mn、炭化物含む
30	7.5YR4/4	褐色弱粘質土
31	10YR4/2	灰黃褐色弱粘質土(やや砂質) Mn含む
32	7.5YR5/6	明褐色砂質土 Mn含む
33	10YR4/2	灰黃褐色弱粘質土 粗砂、Mn含む
34	10YR4/3	にぶい黄褐色土 Mn含む
35	10YR4/1	褐色弱粘質土(やや砂質) Mn含む
36	10YR4/4	灰黃褐色砂質土 Mn含む
37	10YR4/3	にぶい黄褐色砂質土 Mn含む

層番号	土色	土質
38	10YR4/4	褐色弱粘質土(やや砂質) Mn含む
39	7.5YR4/1	黄灰色弱粘質土 Mn、砂粒含む
40	10YR3/3	暗褐色弱粘質土(砂粒混) Mn、炭化物含む
41	10YR3/2	黒褐色弱粘質土 Mn含む
42	2.5YR4/2	暗灰黄色弱粘質土 Mn、Fe、炭化物含む
43	10YR3/1	黑褐色粘土 Mn、Fe、炭化物含む
44	2.5Y4/2	暗灰黄色弱粘質土 Mn、炭化物含む
45	2.5Y4/3	オリーブ褐色弱粘質土 Mn、炭化物含む
46	2.5Y4/1	黄灰色弱粘質土 Mn、含む
47	10YR4/1	褐灰色弱粘質土(やや粘り強い) Mn、炭化物含む
48	10YR3/4	暗褐色粘質土 Mn、炭化物含む
53	10YR4/3	にぶい黄褐色弱粘質土(やや砂質) Mn、Fe含む
54	10YR4/3	にぶい黄褐色弱粘質土(砂質) Mn、Fe含む
55	10YR4/2	灰黄褐色弱粘質土(やや砂質) Mn、Fe含む
56	10YR4/2	灰黄褐色弱粘質土(粗砂混) Mn、Fe含む
57	10YR4/2	灰黄褐色弱粘質土(粗砂混) Fe含む
58	10YR4/2	灰黄褐色弱粘質土(粗砂、砂利混) Mn、Fe含む
59	10YR4/3	にぶい黄褐色粘質土(粗砂混) Mn、Fe含む
60	10YR4/2	灰黄褐色弱粘質土 Mn、Fe、細礫含む
61	10YR4/2	灰黄褐色弱粘質土(やや砂質) Mn、Fe含む
62	10YR3/3	暗褐色弱粘質土(粗砂混) Mn、Fe含む
63	10YR3/3	暗褐色弱粘質土(粗砂混) Mn、Fe含む
64	7.5YR3/2	黒褐色弱粘質土(粗砂混) Mn、Fe含む
65	5YR4/8	赤褐色弱粘質土 Mn、Fe、炭化物含む
66	10YR6/3	にぶい黄橙色細砂 Fe含む
67	2.5Y4/1	黄灰色細砂 Fe多量に含む
68	10YR4/3	にぶい黄褐色弱粘質土 Mn、Fe含む
69	10YR4/4	褐色弱粘質土(粗砂混) Mn、Fe含む
70	10YR6/3	にぶい黄橙色粗砂 Fe含む
71	10YR7/3	にぶい黄橙色砂(やや粗) Fe含む
72	10YR4/4	褐色弱粘質土(粗砂混) Mn、Fe含む
73	10YR4/3	にぶい黄褐色小礫 Fe含む
74	7.5YR4/4	褐色粘質土(やや砂質) Fe多量に含む
75	7.5Y4/6	褐色細砂 Fe多量に含む
76	10YR4/1	褐灰色細砂 Fe多量に含む
77	5B3/1	暗青灰色粘土 Mn、Fe、雲母含む
78	10YR4/2	灰黄褐色粘土 Fe、炭化物含む
79	10YR4/2	灰黄褐色粘質土(砂粒多) Mn含む
80	7.5YR4/6	褐色粘質土、褐灰色砂質土混合 Mn、細礫炭化物含む
	7.5YR4/1	
81	10YR4/2	灰黄褐色粗砂 Mn、Fe、細礫含む
82	10YR5/2	灰黄褐色砂質土(砂粒混、弱粘性) Mn、Fe含む
83	7.5YR4/6	褐色砂質土(粗砂) Fe含む
84	10YR4/2	灰黄褐色砂質土(粗砂) Mn、Fe、細礫含む
85	10YR4/2	灰黄褐色弱粘質土(粗砂混) Mn、Fe含む
86	10YR5/2	灰黄褐色砂質土(弱粘性) Mn、Fe、炭化物含む
87	10YR4/1	灰褐色粘質土(粗砂質) Mn、Fe含む



第36図 第70トレンチ SX01遺物出土状況図





北面アゼ面

- 1 上新 10R 4.3 鮎灰色土。上部に黒褐色土。
- 2 砂質 10R 4.3 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 3 10R 4.3 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 4 10R 4.3 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 5 10R 4.3 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 6 10R 4.3 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 7 10R 4.2 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 8 10R 3.1 黒褐色砂質土。Fe. 中含む

西面アゼ面

- 1 10R 4.3 鮎灰色土。Fe. 中含む
- 2 10R 4.3 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 3 10R 4.3 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 4 10R 4.3 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 5 10R 4.3 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 6 10R 4.3 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 7 10R 4.2 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 8 10R 3.1 黒褐色砂質土。Fe. 中含む

南面アゼ面

- 1 10R 4.3 鮎灰色土。Fe. 中含む
- 2 10R 4.3 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 3 10R 4.3 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 4 10R 4.3 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 5 10R 4.3 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 6 10R 4.3 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 7 10R 4.2 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 8 10R 3.1 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 9 10R 3.1 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 10 10R 3.1 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 11 10R 3.1 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 12 10R 3.1 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 13 10R 3.1 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 14 10R 3.1 黒褐色砂質土。Fe. 中含む

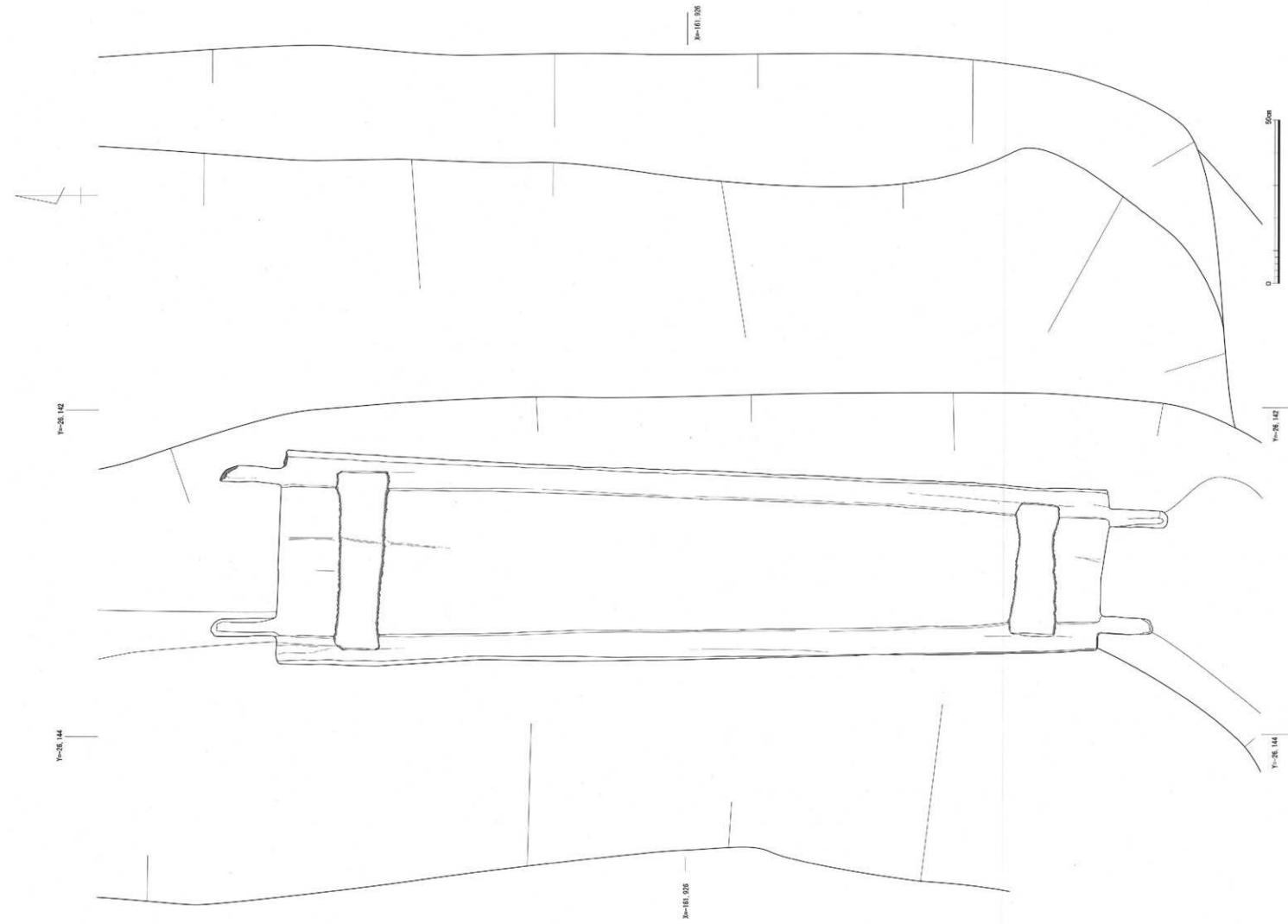
東面アゼ面

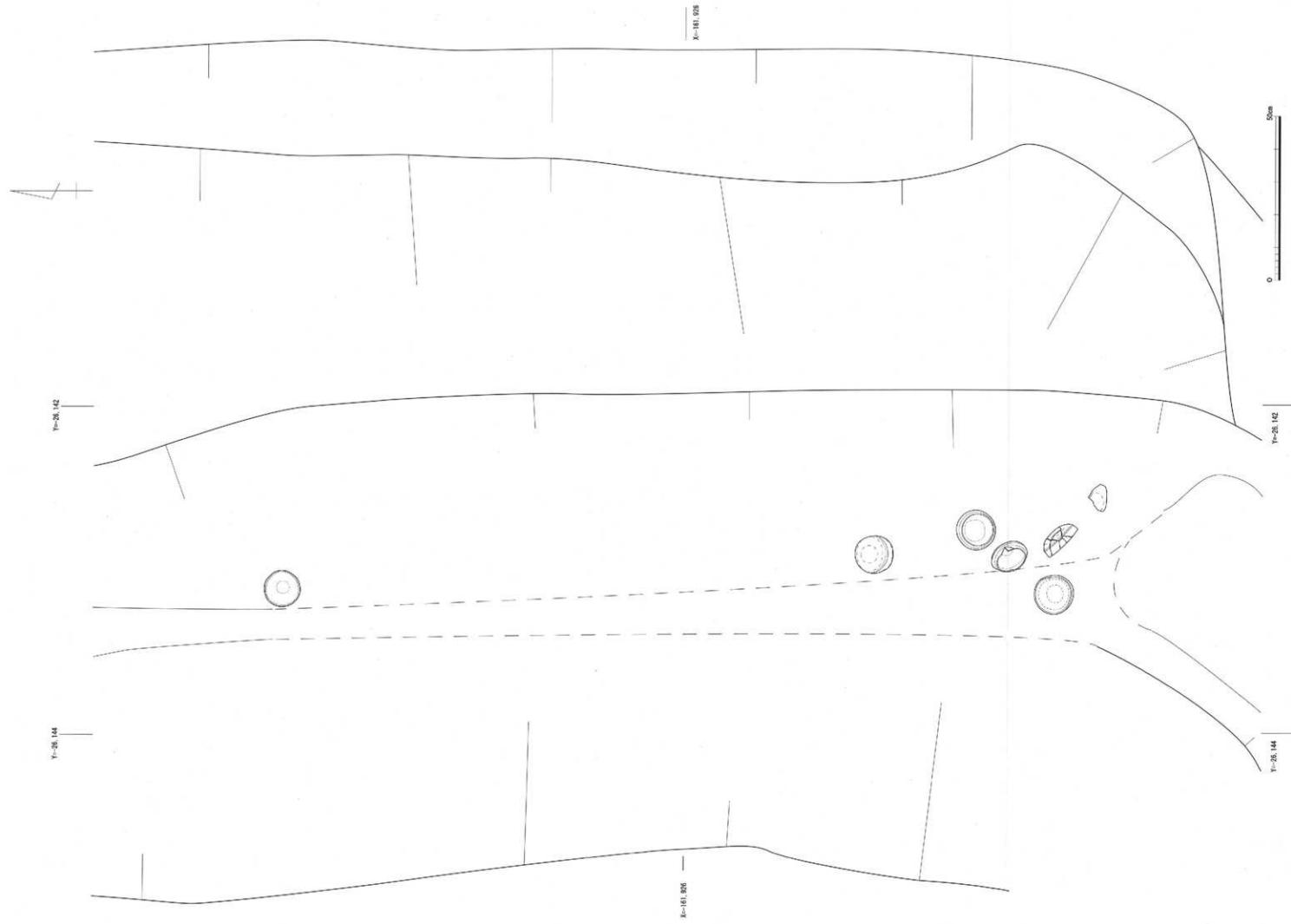
- 1 10R 4.3 鮎灰色土。Fe. 中含む
- 2 10R 4.3 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 3 10R 4.3 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 4 10R 4.3 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 5 10R 4.3 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 6 10R 4.3 黒褐色砂質土。Fe. 中含む
- 7 10R 4.2 黒褐色砂質土。Fe. 中含む

0 2m

第37図 第70トレンチ 下田販賣2号塊 平面・開溝セクション断面図

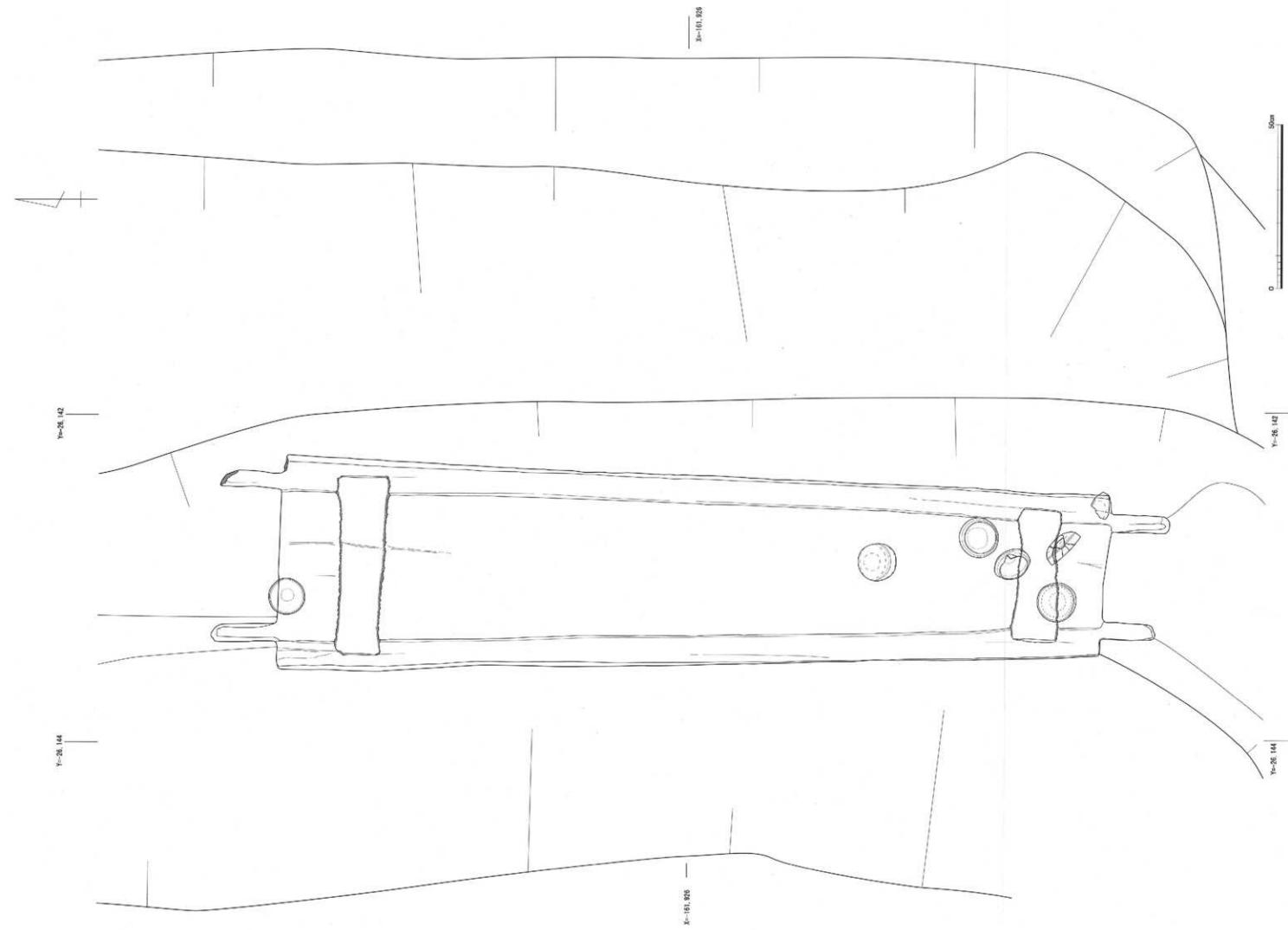
第38図 第70トレンチ 下田東2号地 木棺底板出土状況図

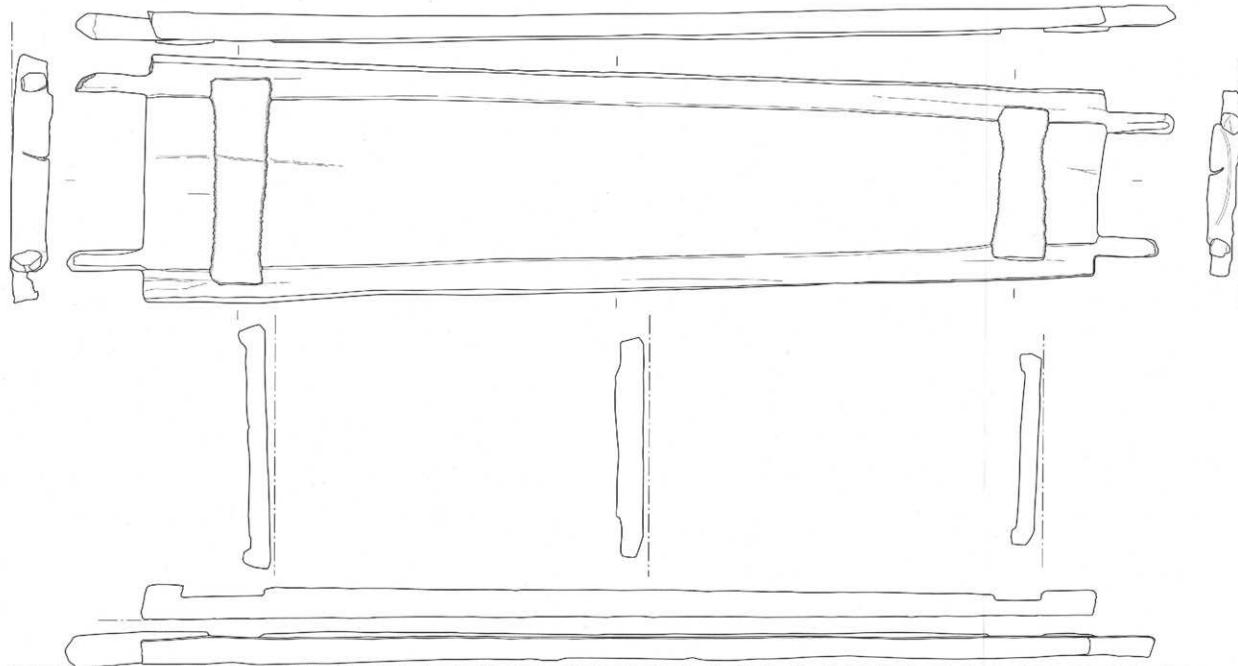




第39図 第70号レンチ 下田東2号墳 木棺底板面下遺物出土状況図

第40図 第70トレンチ 下田東2号墳 木棺底板、漆物相関図

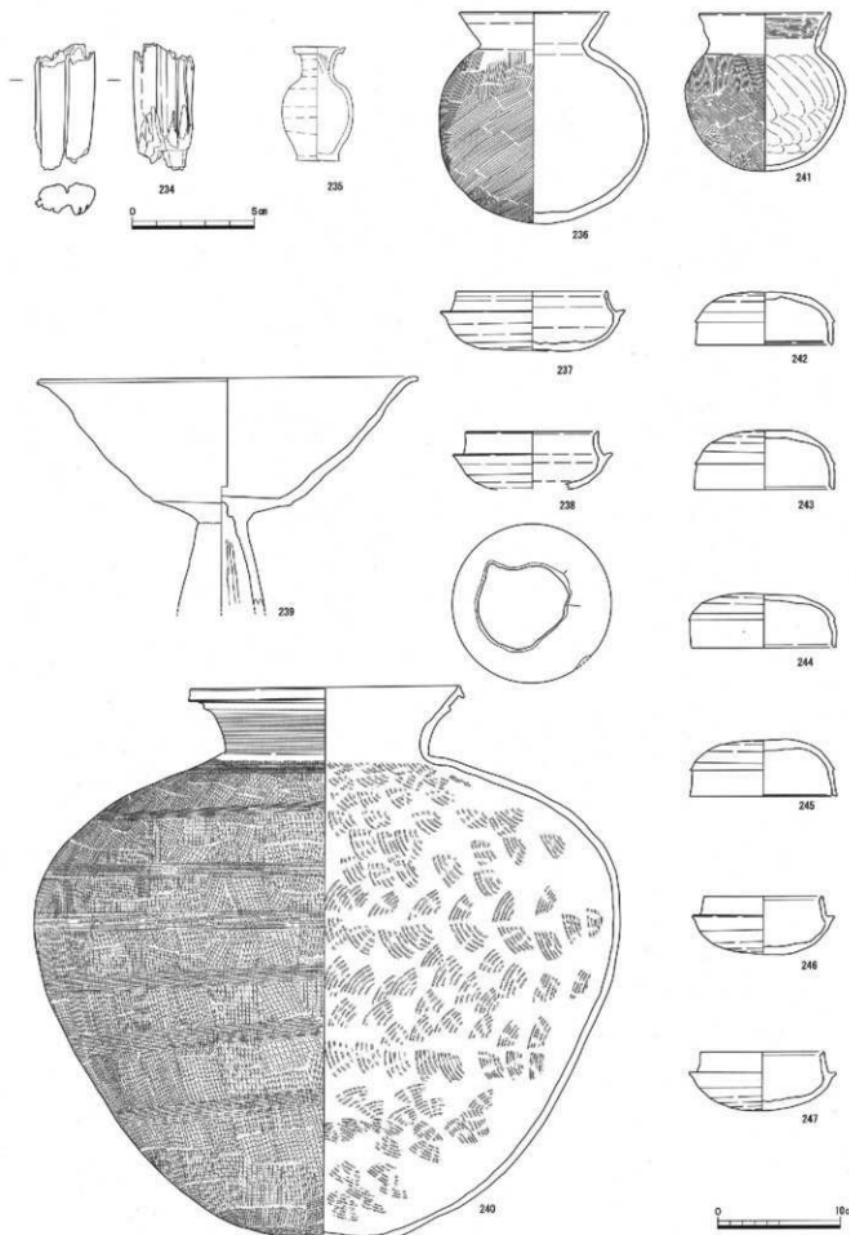




233



第41図 第70トレンチ下田東2号墳出土木棺底板実測図



第42図 第70トレンチ第Ⅱ層、旧河道、SX01、下田東2号墳出土遺物

第3表 第70トレンチ出土遺物観察表

図番号	出土遺物		法量(cm)			色調		胎土	焼成	残存率(%)	備考
	種別	器種	口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外	内				
234		馬齒	5.15	2.4							
235	須恵器	小型壺	4.1	3.45	9.45	N6/0灰		密/0.5mm以下 の長石、 チャート、 黒色粒子	良	90	
236	土師器	丸底壺	12.1		17.3	10TR7/3 にぶい 黄褐		密/2.0mm以 下の長石、 チャート、 金雲母	良	80	
237	須恵器	环身	12.2		4.9	N6/0灰		密/2.0mm以 下の長石、 チャート	良	90	
238	須恵器	环身	10.7		4.75	N8/0灰 白		やや粗/1.5 mm以下の長 石、チャー ト	やや 軟	80	底部穿孔
239	古式土 師器	大型高 壺	30.6		18.85	5YR7/8 橙		密/2.0mm以 下の長石、 石英、チャー ト、金雲母、 赤色粒 子	良	75	
240	須恵器	大型壺	22.0		45.7	N7/0灰 白		密/1.0mm以 下の長石、 チャート	良	80	
241	土師器	壺	10.6	--	12	7.5YR6/6 燈	7.5YR6/4 にぶい燈	密	良好	95	肩部外面:ハ ケ 内面:ユ ビナデ 口 縁部内面:ヨ コナデ後ヨ コハケ
242	須恵器	环蓋	11.1	--	4.8	N71灰 白	N71灰 白	密	良好	100	
243	須恵器	环蓋	11.4	--	4.8	N61灰	N61灰	密	良好	100	
244	須恵器	环蓋	11.8	--	4.4	N71灰 白	N61灰	密	良好	100	
245	須恵器	环蓋	12.0	--	4.7	N61灰	N61灰	密	良好	100	
246	須恵器	环身	9.6	--	4.7	N61灰	N51灰	密	良好	ほぼ 100	口縁部僅か に欠損
247	須恵器	环身	10.0	--	4.8	N51灰	N71灰 白	密	良好	100	



樹種調査結果

コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ (*Solidadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.)

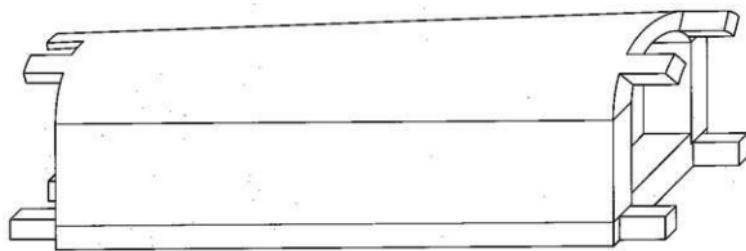
木口では仮道管を持ち、早材から晚材への移行はやや緩やかで晚材部の幅は極めて狭い。

板目では放射組織の分野壁孔は小型の状態で1分野に1~2個ある。

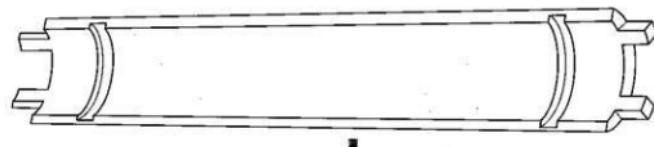
板目では放射組織はすべて單列であった。

コウヤマキは本州(福島以南)、西国、九州(宮崎まで)に分布する。

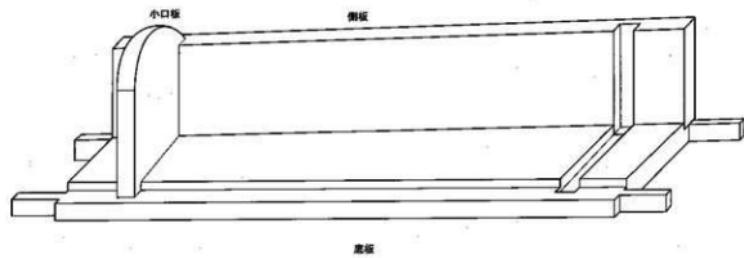
第43図 第70トレンチ下田東2号墳出土木棺底板 樹種同定結果



横立状態



側面



底板

第44図 下田東2号墳出土組合式木棺復原模式図

第4表 木棺計測比較表

	内寸全長(cm)	内寸広端幅(cm)	内寸狭端幅(cm)	内寸広端高(cm)	内寸狭端高(cm)	
三倉堂1号木棺	250	69	57	40	36	
三倉堂2号木棺	285	66	54	39	36	
三倉堂3号木棺	249	54	47	44	40	
三倉堂4号木棺	180	42	31	38	38	
三倉堂5号木棺	175	45	45	32	29	
土保山古墳1号棺	235	60	50	40	35	
土保山古墳2号棺	220	45	40	-	-	
富木草塚古墳前方部Ⅰ主体部	240	50	47	-	-	
富木草塚古墳前方部Ⅱ主体部	220	68	60	-	-	
富木草塚古墳前方部Ⅲ主体部	200	55	45	-	-	
富木草塚古墳後円部Ⅲ主体部	200	50	47	-	-	
下田東2号墳木棺	194	45	33	-	-	

	全长：広端幅	全长：狭端幅	広端幅：狭端幅	全长：広端全高	全长：狭端全高	広端全高：狭端全高
三倉堂1号木棺	1:0.276	1:0.228	1:0.826	1:0.160	1:0.144	1:0.9
三倉堂2号木棺	1:0.231	1:0.189	1:0.818	1:0.136	1:0.126	1:0.923
三倉堂3号木棺	1:0.216	1:0.188	1:0.870	1:0.176	1:0.160	1:0.909
三倉堂4号木棺	1:0.233	1:0.172	1:0.738	1:0.211	1:0.211	1:1
三倉堂5号木棺	1:0.257	1:0.257	1:1	1:0.182	1:0.165	1:0.906
土保山古墳1号棺	1:0.255	1:0.213	1:0.833	1:0.170	1:0.149	1:0.875
土保山古墳2号棺	1:0.205	1:0.182	1:0.889	-	-	-
富木草塚古墳前方部Ⅰ主体部	1:0.208	1:0.196	1:0.940	-	-	-
富木草塚古墳前方部Ⅱ主体部	1:0.310	1:0.273	1:0.882	-	-	-
富木草塚古墳前方部Ⅲ主体部	1:0.275	1:0.225	1:0.818	-	-	-
富木草塚古墳後円部Ⅲ主体部	1:0.250	1:0.235	1:0.940	-	-	-
下田東2号墳木棺	1:0.231	1:0.170	1:0.733	-	-	-

下田東2号墳出土木棺復元規格

	内寸全長(cm)	内寸広端幅(cm)	内寸狭端幅(cm)	内寸広端高(cm)	内寸狭端高(cm)	
下田東2号墳木棺1(三倉堂1号通用)	194	45	33	31.040	27.936	
下田東2号墳木棺2(三倉堂2号通用)	194	45	33	26.384	24.444	
下田東2号墳木棺3(三倉堂3号通用)	194	45	33	34.144	31.040	
下田東2号墳木棺4(三倉堂4号通用)	194	45	33	40.934	40.934	
下田東2号墳木棺5(三倉堂5号通用)	194	45	33	35.308	32.010	
下田東2号墳木棺6(土保山古墳1号棺通用)	194	45	33	32.980	28.906	

まとめ

第68トレンチで検出した主要な遺構は、古墳時代後期および、古代から中世以降に比定される。これらは、第5次調査の際にK地区で検出したものと大幅な時期差が認められず、一連の遺構群の抜がりとして捉えられる。なかでも、特筆すべき遺構は井戸2である。これは、2個体の円筒埴輪を積み上げて井戸枠としたもので、このような枠構造を有する遺構は、当遺跡では初の検出例である。同様のものは奈良県内や大阪府羽曳野市周辺にも認められるが、絶対数は少なく、稀少な出土例といえる。これらは何れも古代に構築されたと考えられている。今回出土したものについても、6世紀後半に造られ、7世紀初頭、遅くとも前半のうちに機能を停止したと考えられる。今回および5次調査の成果から、当該地域は古墳時代後期から古代においては居住域であり、その後に生産域へ移行したと考えられる。その時期は平安時代以降と推定することができ、井戸1、3を埋めた砂層堆積がその変化の端緒となったと考えられる。

第69トレンチの遺構密度は低く、検出した遺構は素掘小溝にくわえ、土坑1および井戸1基のみであった。土坑1は羽釜を利用した水溜機能を有する遺構と思われる。井戸は、上部を方形枠、下部を削抜き材と曲物で構築した、二段構造もまた、当遺跡においては初めての出土例である。これまでの調査で様々な枠構造をもつ井戸が出土しているが、第68トレンチで出土した円筒埴輪転用枠の例とあわせ、当遺跡で使用された井戸枠構造の多様さを示す資料が増えたといえる。他に流路を検出しているが、これについては、第3次および第4次調査C地区において検出した旧河道3000と一連のものになる可能性がある。

第70トレンチでは下田東2号墳を検出し、その周濠底部から組合式木棺の底板が出土したが、1)平面観察では墓坑掘形、あるいは抜取り痕跡は確認されず、2)周濠の埋土は木棺底板上層、他の3ヶ所とも同一時期の自然堆積によるものであり、3)木棺取上前後のセクション断面においても、墓坑掘形ないし抜取り痕跡は観察されなかった。また、4)木棺底板は頭側を北に向けて正方位にのり、直下からは須恵器が出土している。古墳築造および木棺底板が置かれた時期は、底板の年代測定結果およびこれらの須恵器から、5世紀後半から6世紀初頭であり、周濠埋土に包含される遺物から、周濠が完全に埋没するのは平安時代以降と考えられる。

周濠内に木棺材、土器が置かれた理由あるいは目的については、いくつかの想定をし得るが、以下に述べるように、何れも問題が残る。

1. 周濠内埋葬

周濠内埋葬を行ったと仮定した場合、出土状況から、周濠底部に直接木棺を置き、封土も被せられなかったと考えられる。その後、底板以外の部材と遺体が移動されたと推定される。しかし、埋葬を行ったとすれば、遺体の入った棺を野ざらしにしておくとは考え難い。くわえて、古墳の周濠は素掘りであるがために肩が崩れやすく、したがって容易に埋没するであろうことは想像に難くない。いずれにせよ、何らかの理由で棺を取り出したのであれば、その時点で棺は埋まっていた可能性が高い。当然、抜取り痕跡が確認されるはずであるが、そのようなものは認められなかった。したがって、周濠内埋葬を行ったとすれば、埋葬時は墓坑を掘らず、封土も被せること無く、なおかつ埋葬直後(周濠が埋没する以前)に底板以外の部材および遺体を

持ち去った状況が想定される。しかし、当古墳が築造された時期における墓制、葬送儀礼等についての検討が必要であろう。

2. 改葬

既に述べたように、周濠埋土は全体が完全に同時期の自然堆積によっており、遺体を移動する際の抜取り痕跡が認められない。改葬を前提とした仮埋葬を行ったとすれば、上記1の周濠内埋葬で想定される状況を肯定することも可能と思われるが、仮埋葬といえども棺を埋めないということはあり得るのか、ということが問題となる。

3. 遺体運搬用具

組合式木棺は埋葬施設内で各部材が組み合わせられる、ということを鑑みれば、遺骸を載せて埋葬地まで運ぶという行為は合理的なように思われる。しかし、埋葬が行われた痕跡が見受けられない今回の出土状況においては、積極的に肯定することは困難であろう。

4. 墓棄

埋葬に用いられたとは考え難い以上、可能性としては最も高いように思われる。しかし、底板は頭側を北にし、正方位に則して置かれており、直下からは須恵器の壊身および壊蓋が出土している。これらのことから、何らかの意図を以て周濠内に置かれたという状況を、完全に排除することはできないと考える。

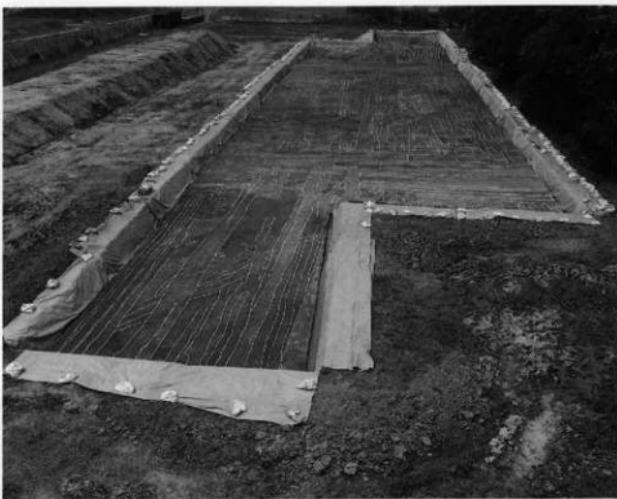
以上のように、墓坑や封土の痕跡が観察されないということから埋葬とは考え難く、単純に廃棄されたとするには、方位にのり、須恵器を共伴する点に疑問の余地が残る。当時の墓制に則った、儀礼的祭祀を行った可能性も否定できないと思われるが、さらに検討を要する。

- したがって、今回の木棺底板出土の成果は、
- ・縄掛け突起が残存している組合式木棺の底板は前例が無く、今後、この種の木棺構造を解明するうえで貴重な資料となること。
 - ・さらに、木棺直葬墓の主体部において、縄掛け突起の痕跡を意識しながら調査を進める必要性を提示したこと。
- という2点に集約されよう。

最後に、今回の調査では調査地一帯の原地形が北西へ向かう傾斜を形成することを確認した。造構としては、旧葛下川の流路、埴輪転用井戸、下田東2号墳を検出し、過去の調査成果とあわせ古墳時代における当該地域の地形、および土地利用のあり方を明らかにし得る成果を得た。とりわけ下田東2号墳の検出は、当事業地一帯に群集墳が築かれていた可能性を示唆し、この地域の古墳築造の変遷をたどるうえで貴重な発見となった。

参考文献

- 香芝市教育委員会編 2006 「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 21」 香芝市教育委員会
- 香芝市教育委員会編 2006 「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 22」 香芝市教育委員会
- 香芝市教育委員会編 2007 「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 25」 香芝市教育委員会
- 香芝市教育委員会編 2008 「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 27」 香芝市教育委員会
- 文化財学論集刊行会編 1994 「文化在学論集」「河内地域における弥生時代の木棺の型式と階層」
田中清美 文化財学論集刊行会
- 権原考古学研究所編 1994 「権原考古学研究所論集 第十一」「木棺系統論・釘を使用した木棺の復元的検討と位置づけ」岡林孝作 吉川弘文館
- 権原考古学研究所編 1962 「近畿古文化論叢」「組合式木棺について」藤原光輝 奈良県教育委員会
- 1978 「考古学研究 第 25 卷 第 2 号」「古墳時代木棺に用いられた緊結金具」田中彩太 考古学研究会
- 1985 「考古学研究 第 32 卷 第 1 号」「弥生時代の木棺墓と社会」福永伸哉 考古学研究会
- 1962 「奈良歴史蹟名勝天然記念物調査報告 第十二冊」
- 鐘方正樹著 2003 「井戸の考古学」 同成社



第1造構面（南から）



第3造構面（南から）

K地区第68トレンチ全景



第3造構面全景（北から）



第3造構面南端部（西北から）



第3造構面中央部（西から）



土坑2 検出状況（南から）



井戸1 検出状況（東から）



井戸3 検出状況（南から）

K地区第68トレンチ 各造構1



土坑群完掘状況（西から）



井戸2 検出状況（東から）

K地区第68トレンチ 各遺構2



井戸枠検出状況1（東から）



井戸枠検出状況2（東から）

K地区第68トレンチ 井戸2



第2造構面（北から）



第3造構面（南から）

J地区第69トレンチ 全景



土坑 1 検出状況（東から）



井戸 検出状況（東から）



井戸 井戸枠上段検出状況（東から）



井戸 堆積状況（東から）



井戸 井戸枠下段検出状況（東から）



井戸 井戸枠下段内曲物検出状況（東から）



第70 トレンチ全景（上が北）



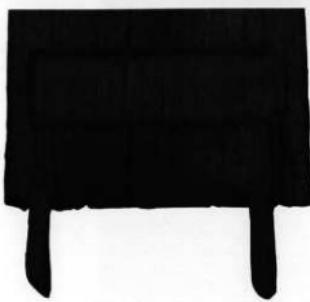
第70 トレンチSX01遺構出土状況（西から）



第70 トレンチSX01出土遺物



下田東2号墳出土木棺底板



小口板落込み小溝（頭側）



小口板落込み小溝（脚側）



短辺側面（頭側）



短辺側面（頭側中央部）

下田東2号墳出土木棺底板



下田東2号墳木棺直下出土須惠器



下田東2号墳南周濠底部出土土師器

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうきゅうねんどかしばしまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいほう
書名	平成19年度香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 28
副書名	
巻次	
シリーズ名	香芝市埋蔵文化財発掘調査概報
シリーズ番号	28
編著者名	辰巳 陽一 清岡 広子
編集機関	香芝市教育委員会
所在地	〒639-0292 奈良県香芝市本町1397番地 TEL 0745-76-2001
発行年月日	西暦2009（平成21）年3月31日

所取遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
							大和都市計画・五位堂駅前区画整理事業
下田東遺跡 (五位堂区画7次)	奈良県香芝市下田東3丁目、狐井	29210	98	34度32分21秒	135度42分46秒	20070611 ~ 20080327	1,745.0m ²

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下田東遺跡 (五位堂区画7次)	旧河道 耕作遺構 古墳	古墳時代 奈良時代 平安時代 中世	旧河道 素掘小溝 土坑 柱穴 井戸 掘立柱建物 方墳	土器 須恵器 黒色土器 瓦器 瓦片 石器 石製品 土製品 木製品 埴輪	

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 28

-平成19年度-

2009(平成21)年3月31日

編集・発行 奈良県香芝市教育委員会
〒639-0292 奈良県香芝市本町1397番地
TEL. 0745-76-2001 FAX. 0745-78-9150

印 刷 株式会社 明新社
〒630-8141 奈良県奈良市南京終3丁目464番地
TEL. 0742-63-0661 FAX. 0742-63-0660